定連池東丘古墳群

2003. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代前半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査により、かなり密度の高い内容であることが確認されています。

町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。

一昨年、綾歌町大字栗熊西で有限会社若進産業による大規模な開発が計画されました。計画範囲内には詳細こそ明らかにされていませんでしたが、４基から成る定連池東丘古墳群の所在が伝えられていました。

綾歌町教育委員会では、平成13年度に分布状況の確認調査を実施すると共に開発業者とその保存についての協議を進めて参りました。

その結果、１号墳については現状での保存を継続することとし、２～４号墳については遺構の残存状況から、調査の上、開発を進めることとしました。

４号墳は、本町が実施する初めての横穴式石室をもつ古墳の発掘調査であり、この調査の成果を貴重な資料として今後の調査研究に役立てていけるものと思います。

最後になりましたが、これらの調査に協力され、調査に要する経費の全額を負担いただきました有限会社若進産業、また、香川県教育委員会文化行政課片桐氏をはじめご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月31日

綾歌町教育委員会教育長　土岐道憲

例　　言

1．本書は、有限会社若進産業が計画する開発事業に伴い実施した定連池東丘古墳群（2～4号墳）の発掘調査報告書である。

2．定連池東丘古墳群の発掘調査は、綾歌町教育委員会が主体となり、平成13年度～平成14年度にかけて実施した。

3．調査担当は、綾歌町教育委員会主任主事近藤武司である。

4．調査には、香川県教育委員会事務局文化行政課主任片桐孝浩氏の協力をいただいた。

5．出土した金属製品の保存処理は、奈良大学文学部文化財学科内奈良大学保存科学研究室（代表 西山要一）に委託して行った。

6．本書の執筆・編集は、近藤・片桐が行った。

7．本書の実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また、各図面の方位は、磁北をM.N.、真北をT.N.と表記した。

8．出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。

9．発掘調査および本書の作成に際して以下の方々のご協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

片桐孝浩	青屋真理	加藤恵子	
西山要一	具志堅有紀	高木美和	高浪育子
小松久子	赤澤美代子	久保山律子	野田安政
山本　進	村上政美	吉川典系	宮脇攝子
今田フミ	岡本八重子	吉田ツ子	岩滝信子
松村英三郎	黒木　忠	射場正行	田原　博
木村富雄	三木正則	高尾文男	神　良昭
東條武義	阪口秋良	堀家弘子	

目　　次

本 文 目 次

第１章　調査の経緯 …… 1
　１．地理的環境 …… 1
　２．歴史的環境 …… 1
　３．調査に至る経緯 …… 2
第２章　定連池東丘４号墳　発掘調査の成果 …… 6
　１．墳丘 …… 6
　２．周溝 …… １０
　３．埋葬主体 …… １１
　　①石室構造 …… １１
　　②玄室部床面構造 …… １３
　　③石室構築方法 …… １８
　　④墓壙 …… １８
　４．墓道 …… １８
第３章　まとめ …… １９
第４章　金属製品保存処理 …… １９
　１．保存処理遺物 …… ４６
　２．科学的保存処理前の遺物の状況 …… ４６
　３．保存処理工程 …… ４６
　４．保存処理の結果 …… ４７

挿 図 目 次

第１図　定連池東丘古墳群とその周辺の遺跡 …… 2
第２図　定連池東丘古墳群測量図・トレンチ配置図 …… 5
第３図　調査前墳丘測量図 …… 6
第４図　墳丘・石室内土層断面図 …… 7
第５図　調査後墳丘測量図 …… 9
第６図　周溝内遺物出土状況 …… １０
第７図　周溝内出土遺物実測図 …… １１
第８図　石室平・側面図 …… １２
第９図　玄室床面平面図 …… １３
第10図　石室内出土遺物実測図 …… １５

図　版　目　次

図版１　定連池東丘古墳群 …… ２１
図版２　墳丘・石室内土層堆積状況 …… ２２
図版３　周溝内遺物と調査風景 …… ２３
図版４　玄室部全景 …… ２４
図版５　玄室部全景 …… ２５
図版６　玄室部第一次床面 …… ２６
図版７　玄室内第一次床面出土遺物 …… ２７
図版８　玄室部第二次床面 …… ２８
図版９　玄室内第二次床面出土遺物（初葬時） …… ２９
図版10　玄室部入口状況 …… ３０
図版11　閉塞石 …… ３１
図版12　閉塞石 …… ３２
図版13　初期構築時状況 …… ３３
図版14　玄室部側壁 …… ３４
図版15　石室構築状況 …… ３５
図版16　石室構築状況 …… ３６
図版17　石室構築状況 …… ３７
図版18　墳丘全景 …… ３８
図版19　墳丘築造状況 …… ３９
図版20　墳丘築造状況 …… ４０
図版21　墳丘築造状況 …… ４１
図版22　墳丘築造状況 …… ４２
図版23　出土遺物 …… ４３
図版24　出土遺物 …… ４４
図版25　出土遺物 …… ４５
図版26　保存処理遺物写真 …… ４９
図版27　保存処理遺物Ｘ線写真 …… ５０

第１章　調査の経緯

１．地理的環境

綾歌町は、香川県の中央からやや西寄りに位置し、大高見峰、猫山、城山の連山を南限として、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は横山山塊を境に坂出市・綾南町と接しているため眺望は遮られている。一方、北西部は、土器川流域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の低丘陵が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発する大束川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっている。

このように、綾歌町では、地形・気候・水利に恵まれ、生活するには非常に適していることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどり着くことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。

さらに、大束川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察できる。

定連池東丘古墳群は、大束川水系の水源でもある綾歌町南部連山の内、猫山から北に派生する尾根上に位置し、同尾根上には、弥生時代庄内式併行期の墳丘墓である定連遺跡、後期古墳の熊倉池東古墳が所在する。西側の谷を隔てた尾根上には、町内最大の横穴式石室を有する後期古墳の宇閇神社古墳や弥生時代中期から古墳時代前期にかけて築造された平尾墳墓群が所在する。

少し下った平野部に差し掛かる辺りは微高地が続いており、大束川水系の流路も側近にあることから集落拠点として利用されていたようである。

２．歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査によって行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構を伴うものは、佐古川遺跡の掘立柱建物跡のみであるが遺物の採取量からみても当該期には、既に多くの人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代に入ると次見遺跡、行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、下土居遺跡、佐古川・窪田遺跡といった集落遺跡が確認されている。また、造墓活動も活発に行われるようになってきたようで、佐古川・窪田遺跡で弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された大規模な周溝墓群が確認されている。また、墳丘墓として平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が確認されている。

古墳時代に入ると、集落遺構は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡で僅かに確認されているだけであるが、古墳については様々な所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

前期には、横山山麓上に横山経塚古墳群、横峰古墳群などの讃岐独特の積石塚古墳が築造されている。その直後には同山塊に陣の丸古墳が築造されている。丘陵を南に下ると、現在の住吉地区で平野部に到達するが、その先端部に快天山古墳が築かれている。

1．定連池東丘４号墳(横穴)　2．定連池東丘１号墳　3．定連池東丘２号墳　4．定連池東丘３号墳　5．定連遺跡
6．熊倉池東古墳(横穴)　7．宇閇神社古墳(横穴)　8．畦田５号墳(横穴)　9．椿谷古墳(横穴)　10．畦田古墳群
11．平尾墳墓群　12．津森穴薬師古墳(横穴)　13．休場池東丘古墳群　14．原竜王山１号墳　15．原竜王山２号墳
16．快天山古墳　17．西長尾城跡　18．栗隈城跡　19．行末遺跡　20．行末西遺跡
21．佐古川遺跡　22．佐古川・窪田遺跡　23．石塚山古墳群　24．北原遺跡　25．北原古墳

第１図　定連池東丘古墳群と周辺の遺跡（S=1:25000）

快天山古墳は、この地域の前方後円墳築造形態を集約したものであると同時に、それまで地域の独自文化で行われていた造墓活動の中に畿内の築造様式を取り入れはじめた初期段階のものである。規模も、全長が100m近くあり、この地域では突出したものである。その後は、前方後円墳は終息し、中小円墳が中心となる。

中期後半から後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地上に集中しており、それまでの横山山塊および高見峰山麓では希薄になる。

羽床盆地では、綾川脇の段丘縁辺部に円墳の群集がみられ、その中には津頭東、津頭西、末則古墳など他を圧倒するものも含まれる。

岡田台地上には車塚を中心とした数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される。岡田万塚古墳群は、早くからの開墾等によりそのほとんどが消滅しており、現在その姿を確認できるのはわずか６基となっている。

後期後半には、宇閇神社古墳などの横穴式石室を有する古墳が高見峰北麓に築かれているが群集は認められない。

古代遺跡については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡といった集落遺跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建立されている。中世後半期には南部連山の城山の頂上付近に長尾大隈守元高が居城した西長尾城が築かれる。その一族は、高見峰山塊に栗隈城を築くなど規模を拡大している。

その後、土佐の長宗我部一族の讃岐侵攻により城主が国吉甚左衛門へ代わり、讃岐の拠点としての役目を果たした。豊臣秀吉の四国征伐により滅ぼされるまでの二百年余りその勢力を誇っていた。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も数多く発見されている。

３．調査に至る経緯

平成13年２月19日付けで、有限会社若進産業から大規模開発計画に伴い、区域内の文化財の所在についての照会文書が提出された。区域内には、周知の遺跡として定連池東丘古墳群（１～４号墳）の所在が知られていた。

１号墳は、平成６年度に計画された町道烏田畦田線改良工事に伴う事前調査で１辺９ｍの方墳であることが確認されているが、その他のものについてはその概要が不明であった。

定連池東丘古墳群が所在する同一尾根上や付近には、弥生時代後半期から古墳時代後期後半までに多種多様な墳墓が築かれていることから、開発区域内について埋蔵文化財の所在について踏査を行った。その結果、調査対象は従来から古墳の所在が伝えられていた箇所に絞られた。

平成１３年度に綾歌町教育委員会が２号墳、３号墳、４号墳及びそれぞれの鞍部について試掘調査を実施した。

その結果によると、２号墳は土壙墓若しくは主体部に組み合わせ石棺を有する墳墓である可能性があるが、後世の改変によって当時の原形を留めていないため、その詳細については不明である。

３号墳は、その所在の可能性をも示す資料は得られなかった。

４号墳は、踏査時に地表に露出する石列を確認した。このことから葺石もしくは横穴式石室の一部である可能性があるとの想定のもと、トレンチ調査を行った結果、横穴式石室を有する円墳である可能性が強くなった。

当初露出していた石列については、本来の位置ではなかったものの直下部から安定した

石列が見つかり羨道部の側壁であると考えられた。

調査の結果、定連池東丘古墳群は少なくとも１号墳、４号墳の所在が確認でき、２号墳についても断定はできないが埋蔵文化財の可能性が強いという資料が得られた。

これらの調査結果を踏まえて、綾歌町教育委員会は平成14年１月22日付けで有限会社若進産業に対して照会文書に対する回答を行った。

その後、有限会社若進産業との遺跡の保存についての協議を重ねた結果、１号墳については未盗掘であり墳丘そのものがほぼ完全に残存していることから現状保存とした。２号墳は、文化財の可能性はあるものの試掘調査時以上の資料を得ることは難しいとの判断から記録保存とした。４号墳は、横穴式石室を有する円墳である可能性が非常に強く、付近にも横穴石室を有する古墳が点在していることから、１号墳と併せて現状での保存が望ましいが、既に開墾等によりその上半部が破壊されていることから、発掘調査を実施し、記録保存とすることとした。

発掘調査は、綾歌町教育委員会が担当業務として実施し、調査に要する経費は有限会社若進産業が負担することとした。

定連池東丘４号墳墳丘は大高見峰から北方向に蜘蛛手状に派生する丘陵のうちの一つで、北西に派生する主丘陵から、更に北西部に派生する丘陵上、標高107～111mに位置する。この派生した丘陵上には定連池東丘古墳群として丘陵先端からそれぞれの丘陵頂部ごとに１号墳から４号墳の４基の古墳が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。

丘陵先端の頂部には１号墳が所在し、平成６年度に町道改良工事に伴う事前調査によって一辺９m、高さ1.5mの方墳で、四辺に列石が二段構築され、墳頂部に小竪穴式石室をもつ古墳であることが確認されている。

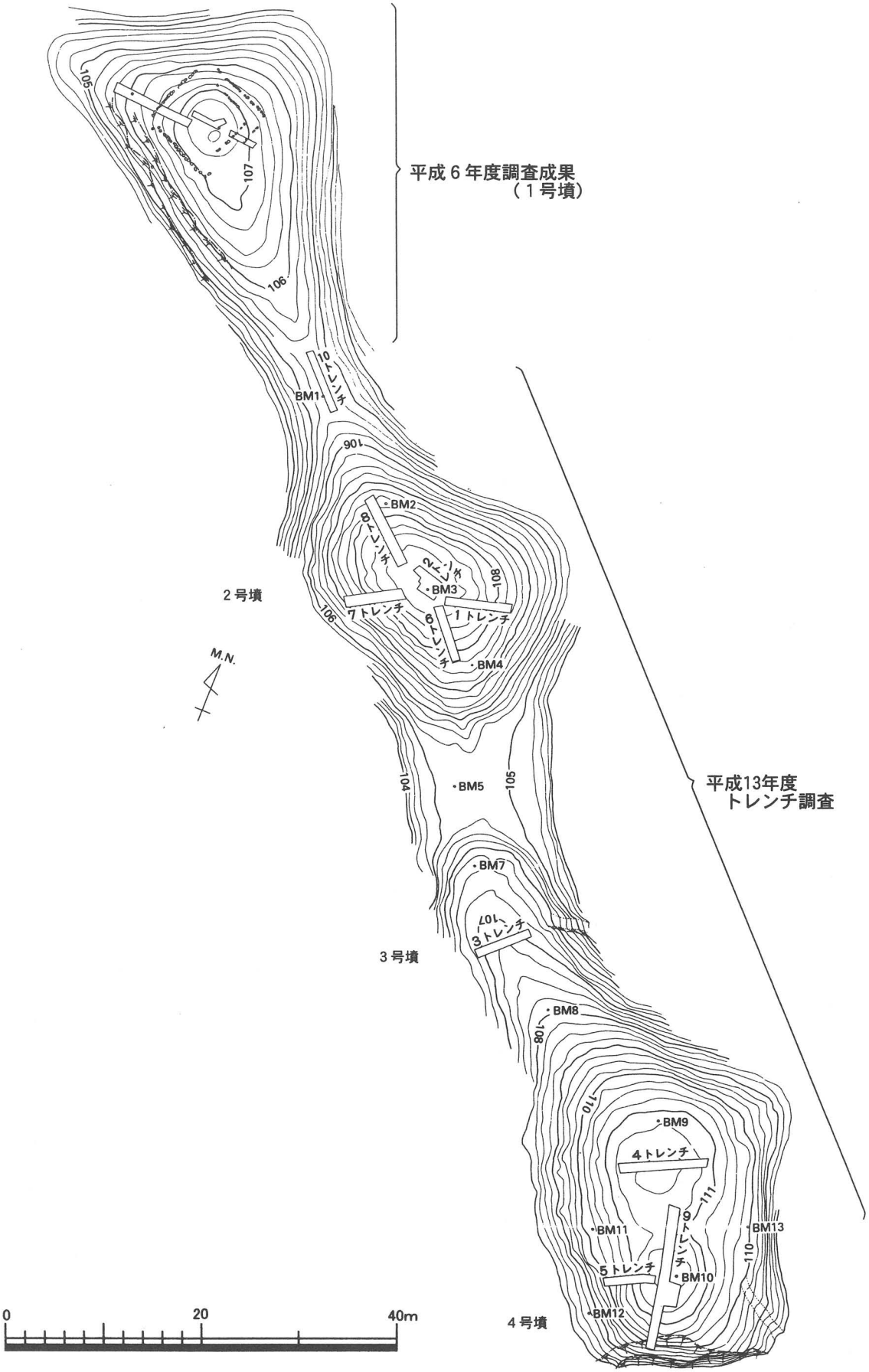
２～４号墳については平成13年に綾歌町教育委員会による試掘調査に正確な位置を確認した。

２号墳は１号墳南側の標高約109m、丘陵頂部中央で２基の主体部を検出した。盛土状の高まりは無く、外表施設も確認されていない。検出した２基の主体部は、１基は土壙墓で、もう１基は小口部の板石を検出し、おそらく組合せ式の石棺であることを確認した。

３号墳については丘陵頂部ではないものの４号墳が所在する丘陵頂部から徐々に北側に傾斜するやや小高い先端部、標高約107mに位置し、土壙墓状の痕跡を確認した。

本報告書に掲載する４号墳は丘陵部の最南端、基部近くの頂部、標高約111.5mにあり、南北約20m、東西約10mの頂部がほぼ中央部で括れていることから、当初前方後円墳ではないかと想定されていた。しかし、発掘調査の結果この括れは丘陵を切断した周溝による括れであることが後日判明した。

調査前には1.5mほどの高まりはあるものの、古墳の墳丘状は呈していなかったが、西斜面部に列状に並ぶ石材が露出していたことから横穴式石室の羨道部の可能性が指摘されていた。平成13年の試掘調査ではこの石材に沿って丘陵主軸に直行するように第５トレンチを、丘陵主軸に第９トレンチを設定した。試掘調査の結果、横穴式石室であることが判明し、石室内堆積土から出土した遺物により、６世紀末頃に築造された古墳であることが解った。



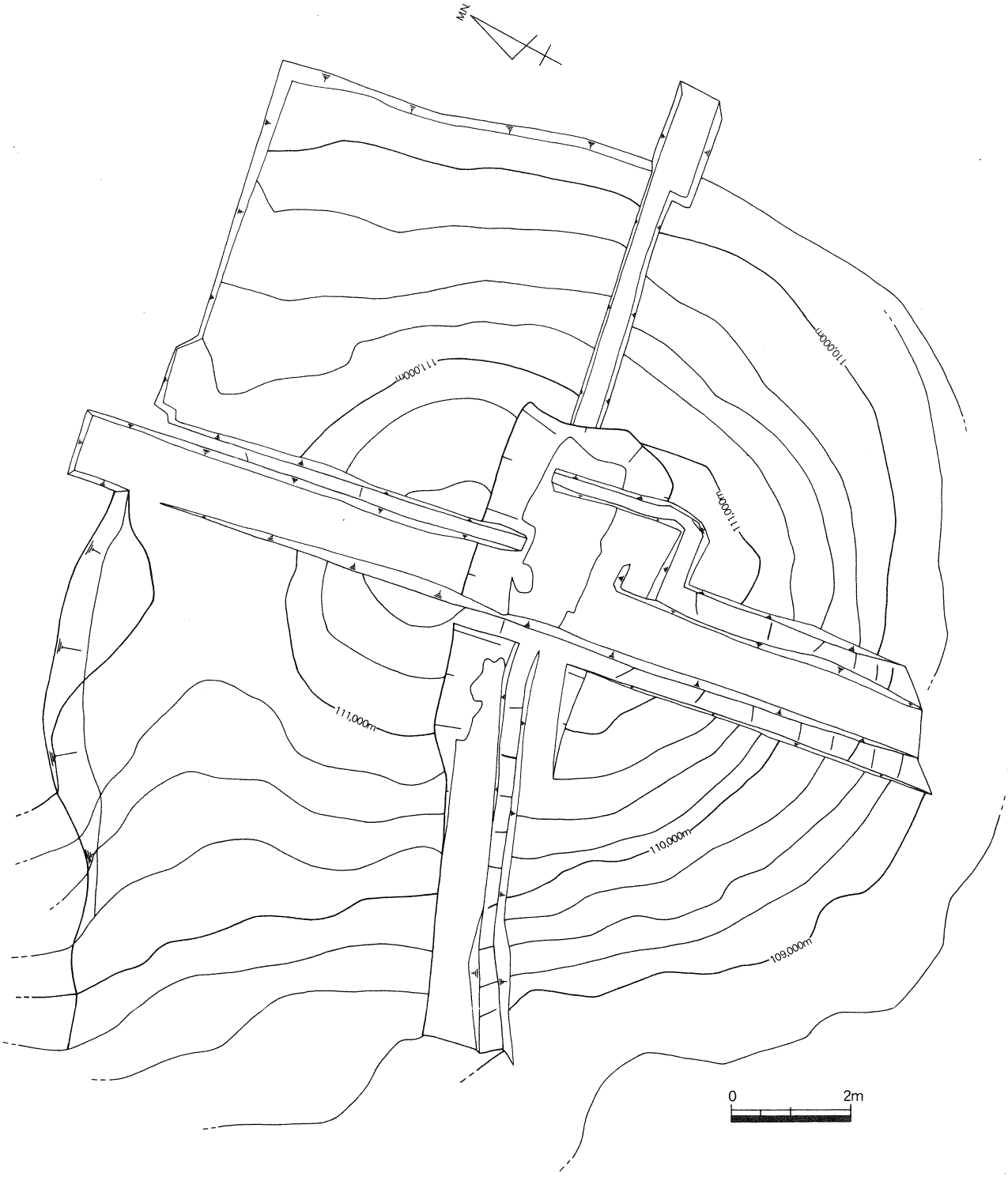
第２図　定連池東丘古墳群測量図・トレンチ配置図（Ｓ＝1：600）

第２章　定連池東丘４号墳　発掘調査の成果

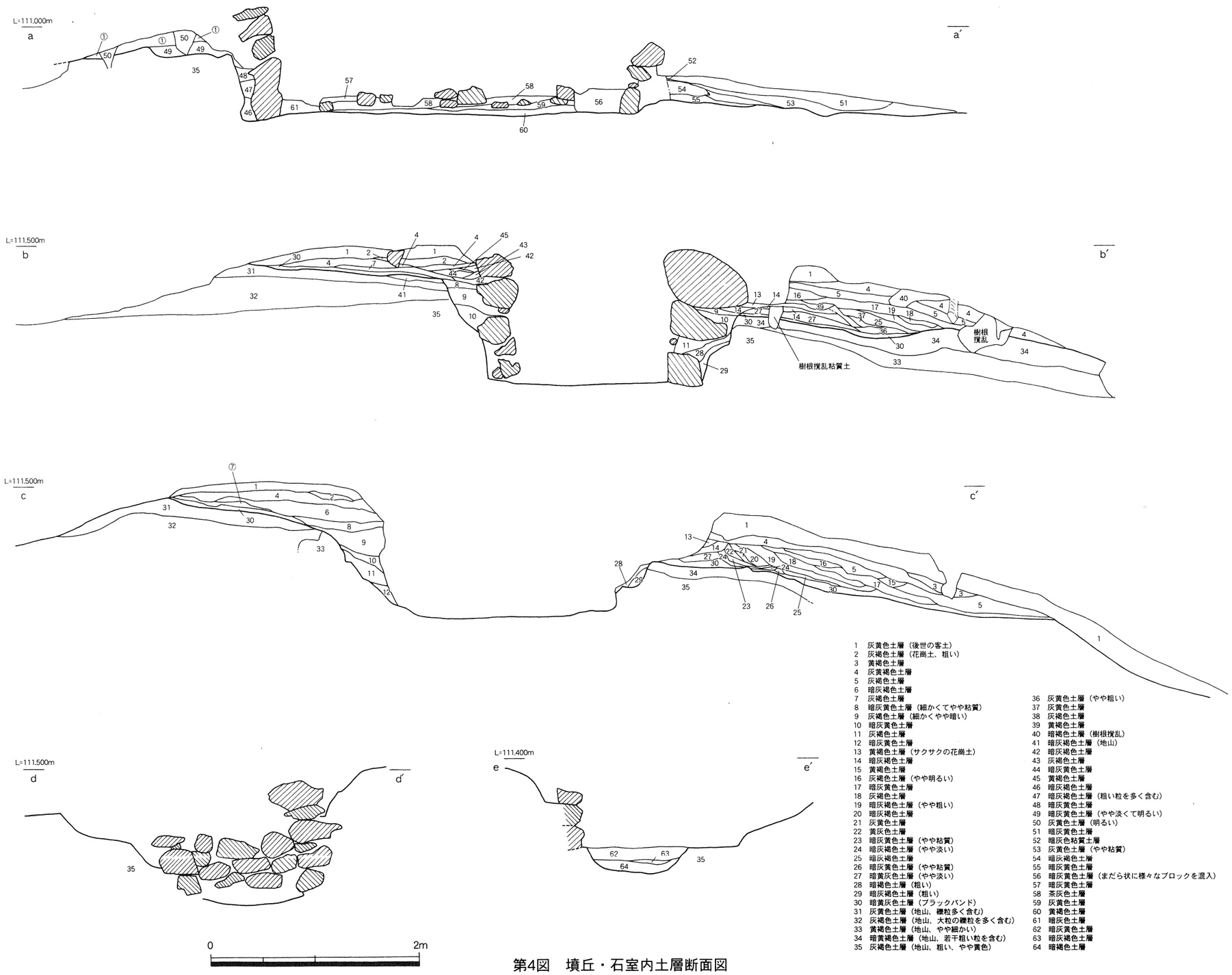
１．墳丘

平成13年に実施した試掘調査（第２図）において調査区南端で横穴式石室を検出したことから、調査範囲を丘陵部南端頂部の南側を中心とし、この部分について現況測量調査から実施した。

現況測量調査（第３図）の結果、調査区中央部に東西方向からの括れが認められ、この

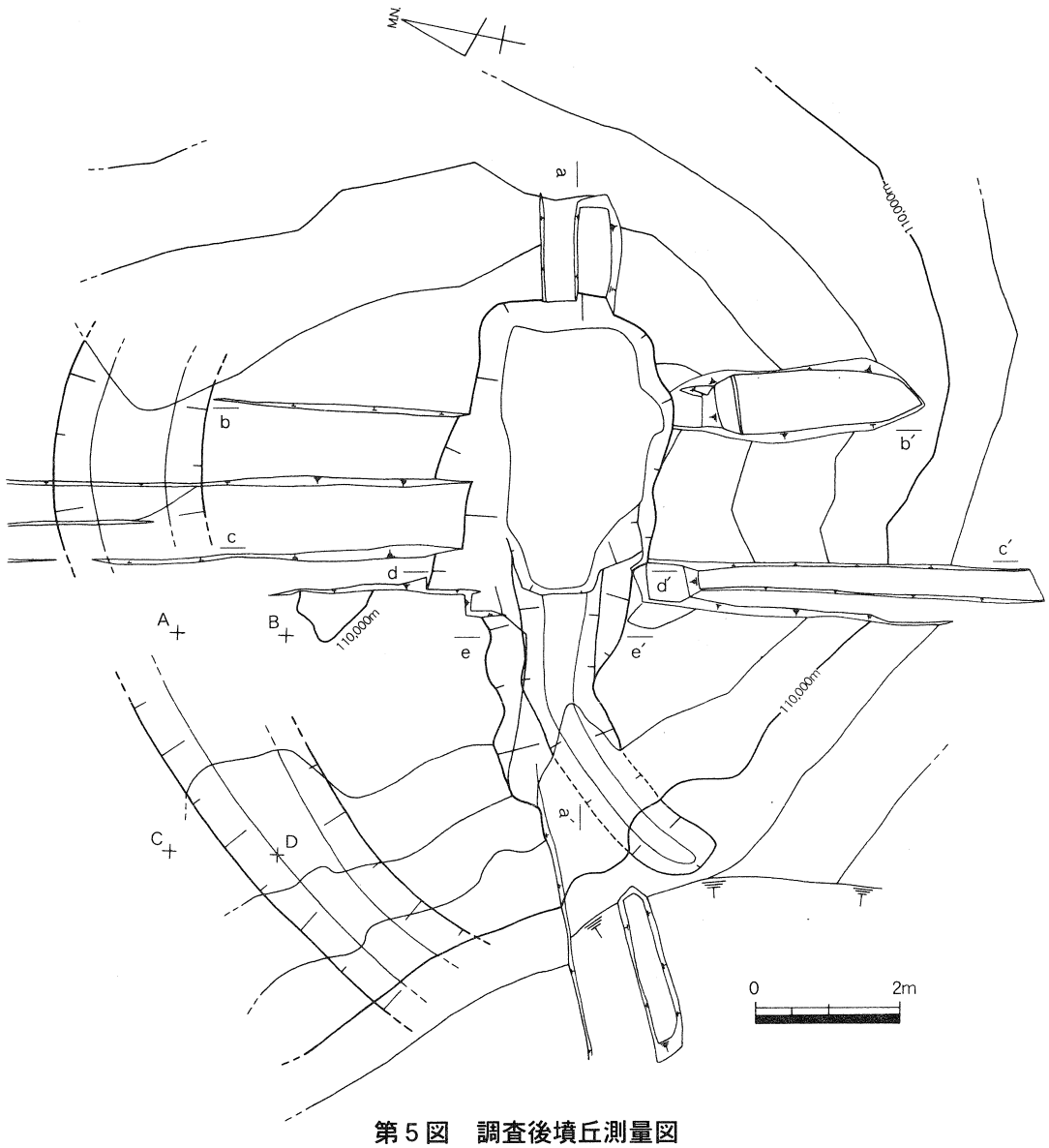


第３図　調査前墳丘測量図



1 灰黄色土層（後世の客土）
2 灰褐色土層（花崗土、粗い）
3 黄褐色土層
4 灰黄褐色土層
5 灰褐色土層
6 暗灰褐色土層
7 灰褐色土層
8 暗灰黄色土層（細かくてやや粘質）
9 灰褐色土層（細かくやや暗い）
10 暗灰黄色土層
11 灰褐色土層
12 暗灰黄色土層
13 黄褐色土層（サクサクの花崗土）
14 暗灰褐色土層
15 黄褐色土層
16 灰褐色土層（やや明るい）
17 暗灰黄色土層
18 灰褐色土層
19 暗灰褐色土層（やや粗い）
20 暗灰褐色土層
21 灰黄色土層
22 黄灰色土層
23 暗灰黄色土層（やや粘質）
24 暗灰褐色土層（やや淡い）
25 暗灰褐色土層
26 暗灰黄色土層（やや粘質）
27 暗黄灰色土層（やや淡い）
28 暗褐色土層（粗い）
29 暗灰褐色土層（粗い）
30 暗黄灰色土層（ブラックバンド）
31 灰黄色土層（地山、礫粒多く含む）
32 灰褐色土層（地山、大粒の礫粒を多く含む）
33 黄褐色土層（地山、やや細かい）
34 暗黄褐色土層（地山、若干粗い粒を含む）
35 灰褐色土層（地山、粗い、やや黄色）
36 灰黄色土層（やや粗い）
37 灰黄色土層
38 灰褐色土層
39 黄褐色土層
40 暗褐色土層（樹根撹乱）
41 暗灰褐色土層（地山）
42 暗灰褐色土層
43 灰褐色土層
44 暗灰黄色土層
45 黄褐色土層
46 暗灰褐色土層
47 暗灰褐色土層（粗い粒を多く含む）
48 暗灰黄色土層
49 暗灰黄色土層（やや淡くて明るい）
50 灰黄色土層（明るい）
51 暗灰黄色土層
52 暗灰色粘質土層
53 灰黄色土層（やや粘質）
54 暗灰褐色土層
55 暗灰黄色土層
56 暗灰黄色土層（まだら状に様々なブロックを混入）
57 暗灰黄色土層
58 茶灰色土層
59 灰黄色土層
60 黄褐色土層
61 暗灰色土層
62 暗灰黄色土層
63 暗灰褐色土層
64 暗褐色土層

第4図　墳丘・石室内土層断面図



第５図　調査後墳丘測量図

括れから南側の平面形態はほぼ円形を呈していることが確認されたが、この頂部の高まりは1.5m程度で、古墳の墳丘状を呈してはいなかった。

発掘調査の結果、墳丘は直径約11mを測り、平面形態が円形を呈する円墳であることが判明した。

古墳の墳丘は墳丘盛土下位の旧腐植土（ブラックバンド、第４図30）や砂粒を含む灰黄色土（地山、第４図31）・暗黄褐色土（地山、第４図34）から、丘陵南端部の北側から南側にかけて約1.2mの高低差のある斜面部に造られていることを確認した。

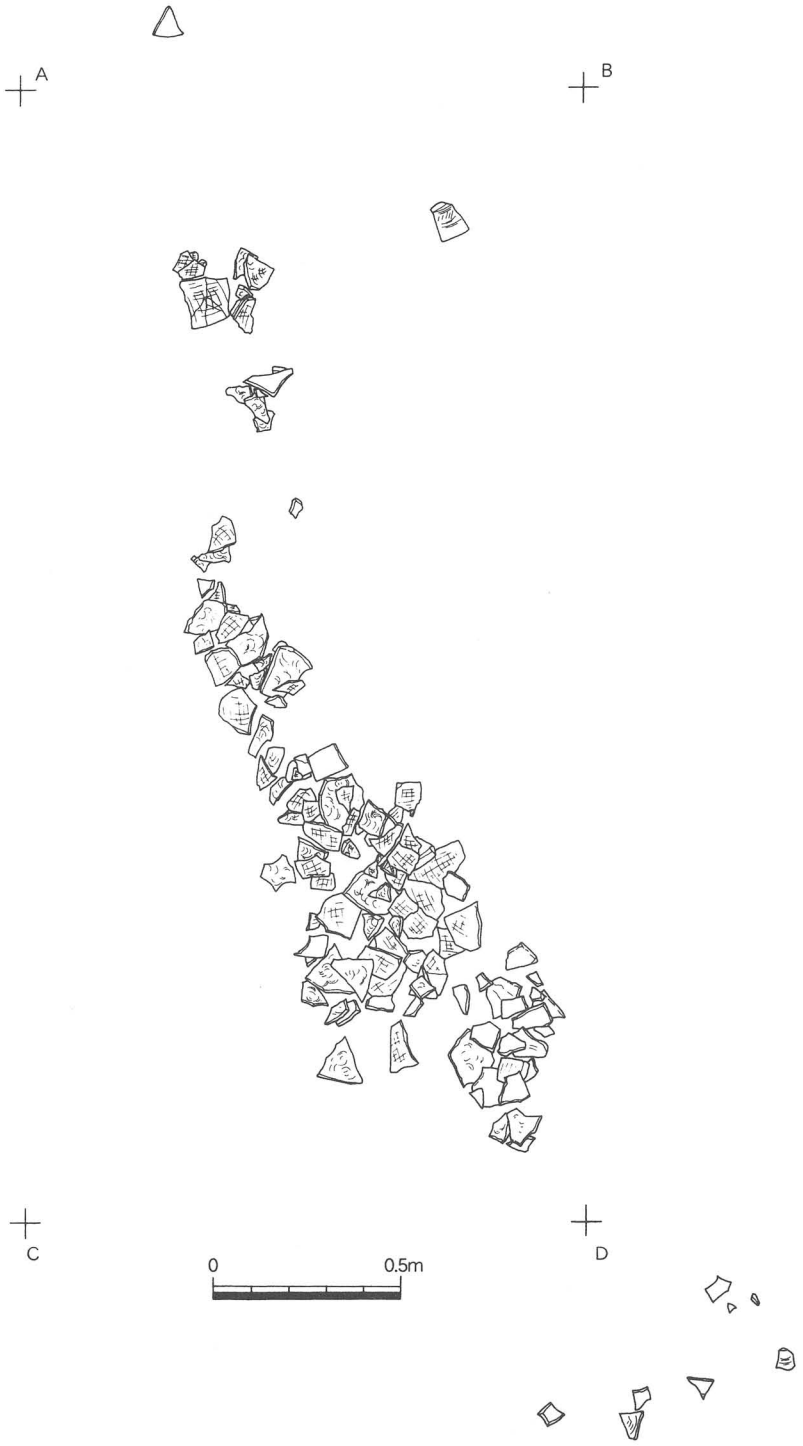
盛土はかなり上部が削平されており、墳丘北側で約40cm、南側で約30cmしか残存していない。盛土は分層の結果、北側では20～30cm程度の灰黄褐色土・暗灰褐色土・暗灰黄色土・灰褐色土などの灰褐色系の土が水平堆積を呈していることを確認し、南側では10cm程度の暗灰褐色土・暗灰黄色土・灰褐色土など灰褐色系の土が地山の傾斜と同じ様に傾斜堆積を呈していることを確認した。

墳丘はかなり削平を受けているものと考えられ、墳丘外面に葺石等の外表施設は確認できなかった。また周溝内からも葺き石と考えられる石材も出土していない。

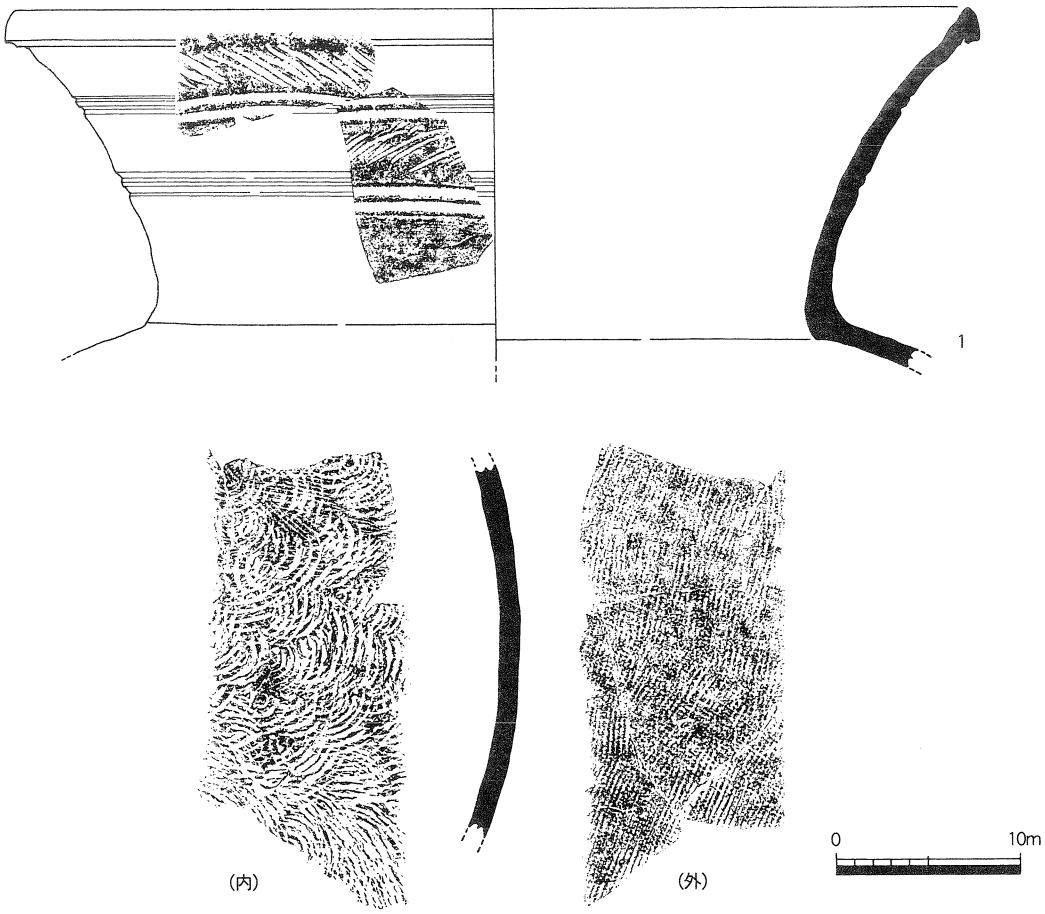
2．周溝

周溝は当初の想定どおり、調査区北側の括れ部分において検出した（第５図）。この古墳の所在する丘陵頂部は北側にも頂部が所在し、南側は基部に向けて鞍部となる。このことから、確認した周溝は北側の頂部と区画するためだけに掘削されたものと考えられ、墳丘西側、東側、南側には当初からなかったものと考える。

検出した周溝は約10mの範囲で、古墳北側を取り囲むように弧状を呈しており、丘陵中央部での最大幅は約３m、深さ約0.3mを測る。周溝断面形は上部の開くU字形を呈して



第６図　周溝内遺物出土状況



第７図　周溝内出土遺物実測図

おり、地山を0.2m程度掘削している。

周溝内西側では大形の須恵器甕（第７図１）が20cm以内の破砕された状態で、周溝やや北よりで検出した（第６図）。出土状態から埋葬当初完形の甕が周溝内に置かれ、周溝埋没時に壊れたものではなく、おそらく埋葬時に使用され、被葬者の埋葬が終了した時点で破砕され、周溝内に敷き並べられたものと考えられる。

１は須恵器甕である。復元することが困難なため、体部全様については不明であるが、体部は球形を呈し、頸部から口縁部にかけてはやや外反しながら外上方に延びる。口縁端部は折り曲げることにより肥厚させる。頸部外面は二重凹線を２段に施すことにより３つに区画する。区画上段には右下がりのヘラ描きを、区画中段には左下がりのヘラ描きを密に施す。区画下段は無紋である。体部外面は２㎜角の格子目叩きを施し、僅かにナデ消す。体部内面は同心円状の青海波紋が認められる。胎土には0.5㎜以下の砂粒を含む。口径51.0cmを計る。

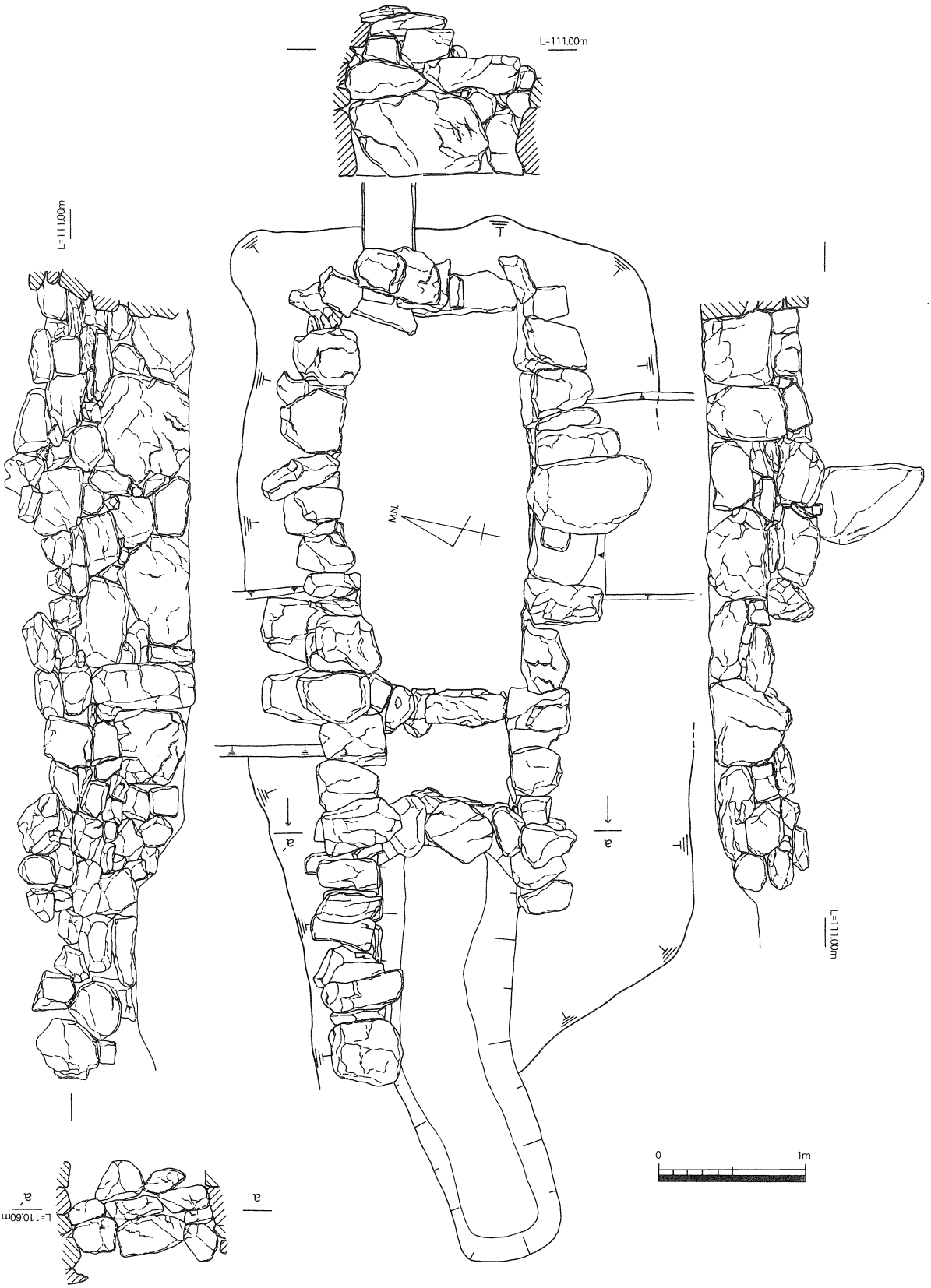
３．埋葬主体

①石室構造（第８図）

古墳は横穴式石室で、埋葬主体の構造は玄室部と羨道部、羨道部から延びる墓道からなる。

玄室部の平面形態（第９図）は両袖式で、長方形を呈するが、床面での規模は長さ約

2.4m、幅は奥壁際で約1.0m、羨道部側で約1.35mを計り、平面形態はやや奥部に向かって狭まる形態である。玄門部は北側に2石、南側に1石を使用し、北側の内1石は玄門立柱の影響を受けたと考えられる石材が直立するように使用されている。この玄門部床面で



第8図　石室平・側面図

袖部分から約20cm羨道部よりに仕切り石を検出した。

玄室部に続く羨道部の平面形態は長方形を呈し、床面での規模は長さ約2.8m、幅約1.0mを計る。羨道部ほぼ中央で40～50cmの石材を積み上げた閉塞石を検出した。

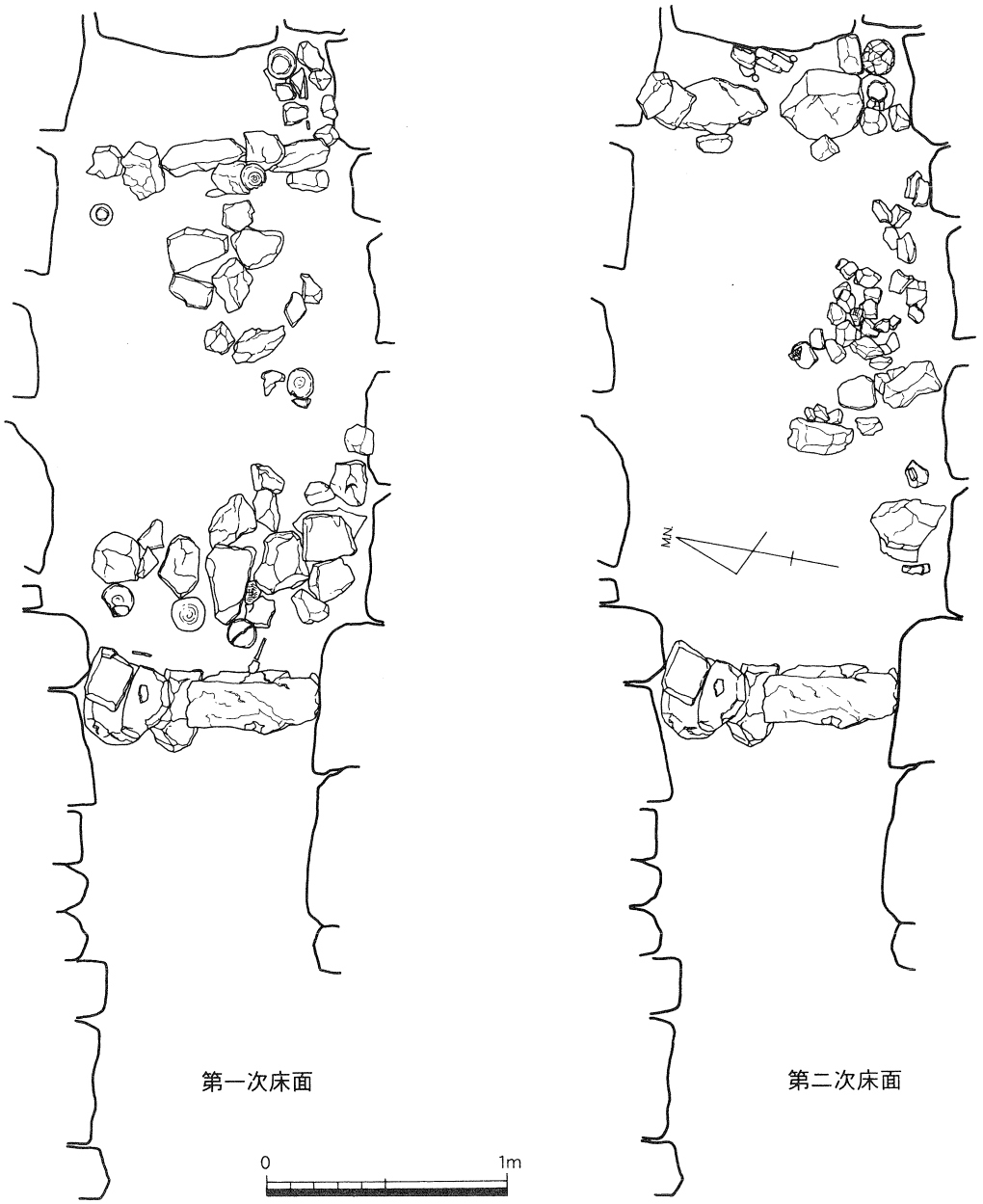
羨道部の床面形態はちょうど閉塞石を検出した部分で分かれており、玄室部側は玄室部と同様に底面が水平な箱型を呈し、墓道側は墓道と同様に断面U字形を呈する。また、羨道部床面は玄室部床面に比べると墓道側が約15cm高くなっており、閉塞石は玄室部側の低い部分に構築されている。

閉塞石に積み直し等の乱れがないことから、追葬時に構築されたものと考えられる。

②玄室部床面構造

玄室部床面は第一次床面（追葬時）と第二次床面（初葬時）の二面検出した（第９図）。

第一次床面は掘削された墓壙の底面、地山直上に約10cm堆積した土層（第４図48～61）



第９図　玄室床面平面図

上面で、15～30cmの砂岩及び花崗岩の角を持った礫を検出した。これらの礫には羨道部側と奥壁側に規則性を持った列石が認められる。

床面羨道部側には20～30cmの角を持った砂岩５石を並列に南北に並べており、仕切り石との間に幅30cmの空間が認められる。その間からは土師器坏（２）、須恵器坏身（４）・坏蓋（３）、須恵器甕（８）、鉄鏃４点（９～12)、刀子（15）が出土している。また奥壁側には幅15cm、長さ35cmの方柱状の砂岩を中心に20cm程度の角を持った砂岩を５石直列状に南北に並べており、奥壁との間に幅35cmの空間が認められる。その間からはほぼ中央部に人骨片と耳環（19・20）が、南側には10cm程度の角を持った砂岩を20×30cmの範囲に敷き詰めた上部から須恵器短頸壺（７）、鉄鏃２点（13・14が出土している。更に両者の間、玄室部中央には約1.5mのスペースがあり、概ね南側に10～20cm程度の角を持った砂岩を不規則に検出した。この部分からは脚部の欠損した須恵器脚付坏２点（５・６）が出土している。

第一次床面の検出状況から羨道部側の砂岩による空間は副葬品を納める空間と考えられる。一方奥壁側の空間は初葬時の埋葬人骨を纏めた空間と追葬時の副葬品を納めた空間と考えられ、第一次床面遺物として取り上げた耳環は初葬時の埋葬人骨に伴うものと考えられる。また中央は棺を納めた空間と考えられ、南側に不規則に並ぶ砂岩が棺台で、脚部の欠損した須恵器脚付坏は儀器として副葬されたものと考えられる。

第二次床面は掘削された墓壙の底面、地山直上で検出した。この床面では砂岩及び花崗岩の角を持った礫を検出した。これらの石列には奥壁側に規則性を持っていることがわかる。

奥壁側北側に20～30cmの角を持った砂岩により20×80cmの範囲で空間が認められる。その間からは鉄鏃２点（23・24)、鉄鎌（22)、刀子（21）が出土している。更に南側には10cm程度の角を持った砂岩により20×30cmの空間が認められる。その間からは須恵器坏蓋（16)、須恵器短頸壺（18）が出土している。それ以外の玄室部には約2.2mのスペースがあり、概ね南側に10～25cm程度の角を持った砂岩を不規則に検出した。その間の北側で須恵器小壷（17）が出土している。

第二次床面の検出状況から奥壁側の空間は二つに分けられ、北側の空間は鉄製品などの副葬品を、南側の空間は土器などの副葬品を納めた空間と考えられる。また中央の空間は南側に不規則に並ぶ砂岩が棺台と考えられる。

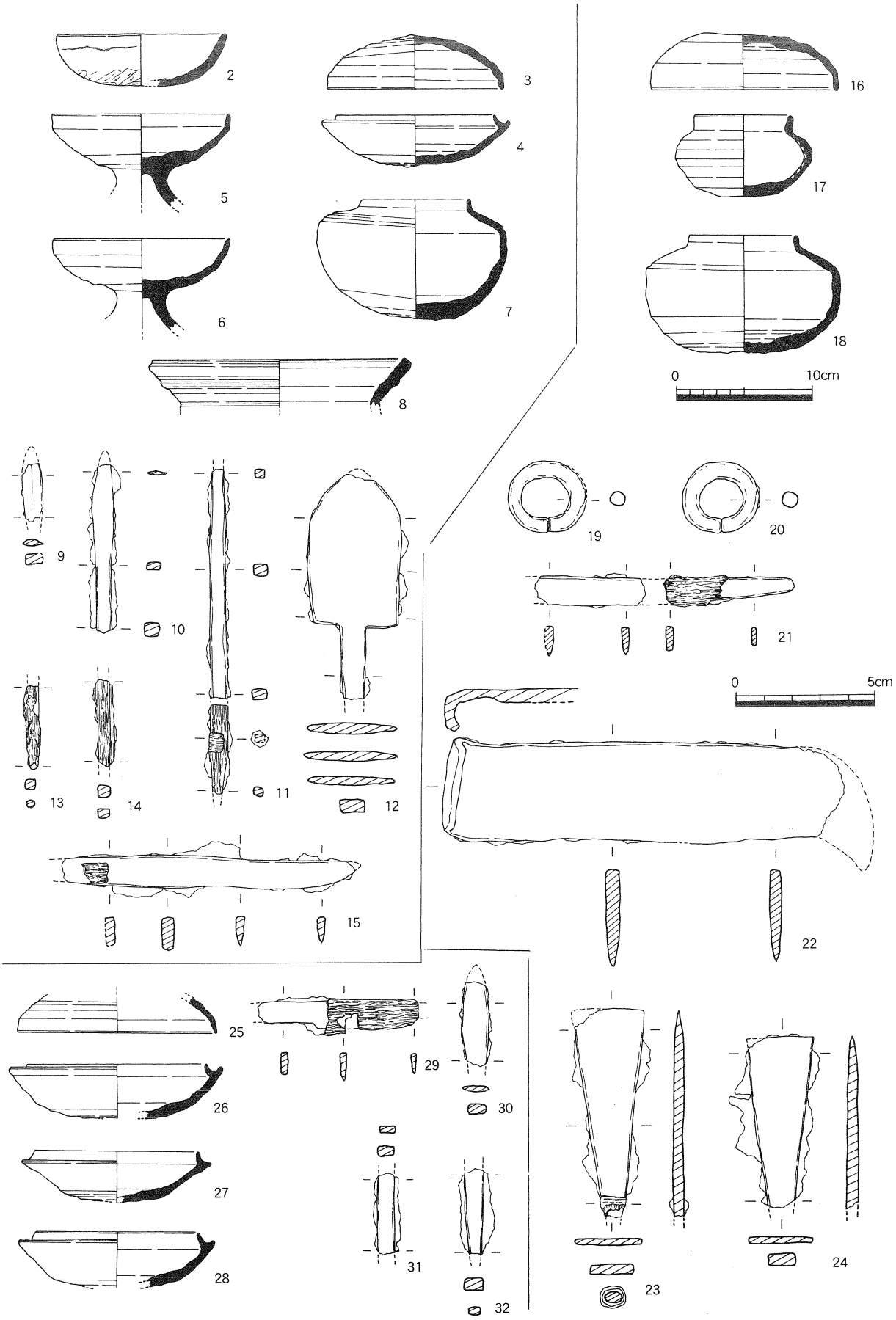
石室床面から遺物が出土している。

２～15は石室内第一次床面出土遺物である。

そのうち２～４・８～12・15は羨道部側の列石により区画された空間から出土したものである。

２は土師器坏である。底部は平底気味の丸底である。体部は内湾し、端部は丸く終わらせる。底部外面に不定方向のヘラ削りが、これ以外は指ナデが施されている。口縁端部外面に粘土接合痕が認められる。胎土には砂粒を多量に含む。器表面はかなり剥落し、磨滅している。口径12.1cm、器高3.7cmを測る。

３は須恵器坏蓋である。天井部は粗いヘラ削りのためやや尖り気味を呈する。天井部から口縁部へはほぼ直線的に延び、口縁部で下方に屈曲し、口縁端部は丸く収められる。天



第１０図　石室内出土遺物実測図

井部外面はヘラ削りされ、内面には不定方向の指ナデが認められる。これ以外は横ナデが施されている。胎土には微砂粒を多量に含む。口径12.7cm、器高3.9cmを測る。

４は須恵器坏身である。底部は粗いヘラ削りのためやや尖り気味を呈する。底部から受け部へはほぼ直線的に延び、受け部端を上方へ摘み上げる。立ち上がりは内傾するが、やや外方に反る。底部外面はヘラ削りされ、以外は横なでが施されている。胎土には微砂粒を多量に含む。口径11.4cm、器高3.7cmを測る。

３・４はやや焼の悪い須恵器の坏身・坏蓋で、色調は灰白色を呈している。おそらく身・蓋のセットとして副葬されたものと考えられる。

８は甕の口縁部で、外上方に直線的に延びる。外面に一条の突帯を持ち、口縁端部は内方に小さく摘み出す。胎土には0.5～1.0mmの砂粒を含む。口径71.3cmを測る。

９・10・11は長頸鏃である。鏃身部が長三角形を呈し、鏃身関部がはっきりせず、鏃身から関部への移行が緩やかなものである。鏃身部の造りは片丸造である。頸部が長く、断面形状は、方形を呈する。茎部の断面形状は方形で、木質痕、樹皮巻の痕跡が確認できる。

12は三角形鏃である。鏃身部は長三角形を呈し、鏃身部の造りは平造である。頸部の断面形状は長方形を呈する。

15は刀子である。刃部の残存長は11cmを測り、柄部に木質痕が認められる。

７・13・14は奥壁側の列石により区画された空間から出土したものである。

７は短頸壺である。底部は丸底で、ヘラ削りされている。体部は内湾し、肩部屈曲部に沈線を施し、稜を持つ。口縁部は短く、垂直に上方に延びる。胎土には0.5～1.0mmの砂粒を含む。口径7.7cm、器高8.7cmを測る。

13・14は長頸鏃の茎部である。茎部の断面形状は方形で、木質痕が認められる。

５・６は玄室中央部南側に配された礫上面から出土した遺物である。

５は脚付坏である。脚部の形状はそのほとんどが欠損しており、不明である。坏部はやや内湾しながら延び、口縁部で上方に屈曲する。胎土には0.5～1.0mmの砂粒を含む。口径12.8cmを測る。

６は脚付坏である。脚部の形状はそのほとんどが欠損しており、不明である。坏部は明瞭な屈曲部を持たず、やや内湾しながら外上方に延びる。胎土には0.5～1.0mmの砂粒を含む。口径12.7cmを測る。

石室内出土遺物中に５・６の脚と考えられる遺物が出土していないことから、おそらく埋葬当初より脚部は欠損していたものと考えられ、日常使用していたものを儀器化し、副葬したものと考えられる。

16～24は石室内第二次床面出土遺物である。

そのうち16・18～24は奥壁部側の列石による空間から出土したものである。

16は須恵器坏蓋である。天井部は中央部がやや窪むが平坦で、天井部から口縁部へはやや屈曲しながら延び、口縁部で下方に屈曲し、口縁端部は丸く収められる。天井部外面はヘラ削りされ、これ以外は横なでが施されている。胎土には砂粒を含む。口径13.5cm、器高3.8cmを測る。

18は短頸壺である。底部は平底気味の丸底で、ヘラ削りされている。体部は内湾し、肩部屈曲部に沈線を施し、７より明瞭な稜を持つ。口縁部は短く、やや内傾し、上方に延び

る。胎土には0.5～1.5mmの砂粒を含む。口径7.8cm、器高8.5cmを測る。

19・20は銅地の耳環である。最大径は19が2.8cm、20が2.9cmを測る。

21は刀子である。刃部残存長は3.9cm、柄部残存長は4.7cmを測り、柄部には木質痕が認められる。

22は鉄鎌である。刃部は直線的に延び、曲がる曲刃鎌である。木柄着装部の折り返しは刃に直角を呈する。残存長14.5cm、刃部幅は3.5cm、刃部厚は0.5cmを測る。

23・24は方頭鏃である。いわゆる方頭斧箭鏃で、鏃身の造りは平造りである。茎部の断面形状は楕円形を呈し、外面に木質痕と樹皮巻の痕跡が認められる。23の鏃身部先端幅は推定2.7cm、鏃身長は6.8cm、鏃身厚は0.35cmを測る。

17は玄室中央部北側床面から出土した遺物である。

17は小型の壺である。底部は丸底で、ヘラ削りされている。体部は内湾し、肩部屈曲部に稜を持つ。口縁部は短く、やや外傾し、上方に延びる。胎土には1.0～4.0mmの砂粒を含む。口径6.9cm、器高5.9cmを測る。

第一次（追葬時床面）床面出土遺物と第２次（初葬時床面）床面出土遺物には坏蓋の口縁部の屈曲の明瞭差や口径に、短頸壺では肩部の屈曲の明瞭差があり、第二次（初葬時床面）床面出土遺物のほうが、坏蓋の口縁部の屈曲が明瞭で、やや口径も大きい。また短頸壺については肩部の屈曲が明瞭で、第一次（追葬時床面）床面出土遺物より若干古い様相が認められる。

時期は第一次（追葬時床面）床面出土遺物がＴＫ209型式併行期で、第二次（初葬時床面）床面出土遺物がＴＫ43型式併行期と考えられ、６世紀末に築造され、７世紀初頭に追葬が行われた古墳であることがわかる。

25～32は玄室及び羨道部内の堆積土から出土した遺物である。

25は須恵器坏蓋である。天井部から口縁部へはほぼ直線的に延び、口縁部で下方に屈曲し、口縁端部は丸く、細く収められる。胎土には微砂粒を多量に含む。口径14.4cmを測る。

26は須恵器坏身である。底部から受け部へはほぼ直線的に延び、受け部端上方へ摘み上げる。立ち上がりは内傾気味に直線的に延びる。底部外面はヘラ削りされ、以外は横ナデが施されている。胎土には微砂粒を含む。口径13.0cmを測る。

27は須恵器坏身である。底部はヘラ削りのためやや平底気味を呈する。底部から受け部へはほぼ直線的に延び、受け部端は水平に延びる。立ち上がりは内傾気味に直線的に延びる。底部外面はヘラ削りされ、これ以外は横ナデが施されている。胎土には１mm以下の砂粒を多量に含む。口径12.0cm、器高3.7cmを測る。

28は須恵器坏身である。底部から受け部へはほぼ直線的に延び、受け部端は上方へ摘み上げる。立ち上がりは内傾気味に直線的に延びる。底部外面はヘラ削りされ、それ以外は横ナデが施されている。胎土には微砂粒を少量に含む。口径11.9cmを測る。

29は刀子である。刃部の残存長は６cmを測り、柄部に木質痕が認められる。

30～32は長頸鏃である。鏃身部が長三角形を呈し、鏃身関部がはっきりせず、鏃身から関部への移行が緩やかなものである。鏃身部の造りは両丸造である。頸部が長く、断面形状は、方形を呈する。

これら出土遺物の時期は玄室床面出土遺物と時期差は無く、同時期と考えられる。

③石室構築方法

玄室部と羨道部の側壁及び奥壁の構築には石材として、若干角を持った砂岩及び花崗岩、結晶片岩が使用されている。残存する石材中、砂岩は74%、花崗岩は25%、結晶片岩１%と砂岩が半数以上占めている。また、それぞれの石材には使用に規則性は認められず、石室構築時に使用された石材は古墳周辺で採集されたものと考えられる。

これらの石材を使用し、玄門部を含む玄室の側壁は基底石として40～70cmの大形の石材を使用するが、あまり奥行きがない。ちょうど２段掘り状を呈した墓壙掘り方の下位部分にこの大形の石材は使用されている。上位部分は墓壙掘り方が広くなっていることから、方柱状の石材の小口部分を内面にそろえて、積み上げられている。そのため側壁は基底石が大きく、上部になるとやや小振りの石材となり、やや持ち送り状に内傾する。

玄室奥壁は側壁より更に大きい60×90cmの石材を使用している。しかしこの石材も奥行きは30cmと薄い板状を呈している。

玄室部の側壁を見ると大型の石材と小型の石材の境は床面から約70cm部分にあり、ほぼ水平に石材の目地が確認できる。ちょうどこの部分は南側墓壙の地山掘削上端に当たり、この部分が側壁の構築の小休止面と考えられる。おそらく北側でも同様な石室構築方法をとっていたものと推測できる。

羨道部の側壁は玄室部とは違い、基底部分から20～30cm程度の小振りの石材を使用し、上部では方柱状の石材の小口部分を内面にし、持ち送り状に積み上げている。また墓壙床面がちょうど閉塞石を積み上げた部分で墓道側が高くなっているのと同じ様に、基底部底面も約30cm高くなっている。

玄室部、羨道部の側壁及び奥壁の残存高は１m程度で、石室の上部構造は不明である。

④墓壙

墓壙掘り方は玄室及び羨道部の一部までの平面形態が長方形を呈し、長さ約4.2m、幅は上面で約2.8m、下面で約2.0mを測り、底面から30～40cmの部分で不明瞭ではあるが、段を持つような２段掘りの形態をしている。そのため下位は断面形態が箱型を呈し、上面では上開きで、深さは地山を約１m掘削している。また羨道部前端掘り方が手鏡状に取り付いており、規模は長さ2.7m、幅1.5mで、平面形態が長方形を呈する。深さは約0.9mを測り、断面形態は上開きのU字状を呈する。

４．墓道

墓道は２時期確認されており、一次（追葬時墓道）墓道は羨道部からやや南に屈曲し、約1.4m延びる。幅約0.8mを測り、深さ約0.2mで、断面U字形を呈する。二次（初葬時墓道）墓道は更に南に屈曲し、長さ約2.0m延びる。幅約0.8mを測り、深さ約0.3mで、断面U字形を呈する。

第３章　まとめ

綾歌町は丸亀平野の南東部に位置し、町内は南に大高見峰、猫山、城山の連山が位置し、そこから延びる低丘陵、大束川水系によって形成された肥沃な平野で構成されている。南の連山に水源がある大束川はちょうど町域北端部で西から大束川、中大束川、東大束川の３つに分かれ、更にその支流である大窪谷川、沖川、猫谷川などが蜘蛛手状に延びている。

町内に所在する古墳の位置を見るとそれぞれの河川と河川によって形成された平野を生活基盤としていたものと考えられ、西から大別して大束川水系、中大束川水系、東大束川水系ごとに古墳の分布が認められる。

大束川水系では岡田万塚古墳群（古墳時代中期）を中心として滝鼻古墳群（詳細不明）、重光古墳群（詳細不明）などが所在する。次に中大束川水系には今回報告する定連池東丘古墳群（弥生時代終末～古墳時代後期）、平尾古墳群（弥生時代終末～古墳時代前期）、石塚山古墳群（弥生時代終末～古墳時代前期）などが所在する。最後に東大束川水系には快天山古墳（古墳時代前期）、原竜王山古墳（詳細不明）、休場池東丘古墳（詳細不明）などが所在する。

町内の古墳については、昭和61年に綾歌町教育委員会によって発掘調査が実施された石塚山古墳群、昭和62年に岡山理科大学によって発掘調査が実施された平尾古墳群、昭和60年に奈良大学によって発掘調査が実施された地神山古墳群、平成13～15年に綾歌町教育委員会によって発掘調査が実施された快天山古墳があるのみで、古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳については今回の定連池東丘４号墳が初めてである。

そのため町内の古墳時代後期の立地及び詳細については依然不明な部分が多い。

今回の定連池東丘古墳群が所在する中大束川水系の猫谷川周辺には西側尾根上に宇閇神社古墳、平尾墳墓群、東側尾根上に定連池東丘古墳群、畦田古墳群が所在する。このうち後期古墳が所在するのは定連池東丘古墳群と畦田古墳群、宇閇神社古墳で、宇閇神社古墳は１基、畦田古墳群については不明な部分もあるが横穴式石室を主体部に持つ後期古墳が３基所在、定連池東丘古墳群は１基と綾歌町内での後期古墳はその立地から大規模な群集墳としてではなく、１～３期程度の小規模な群集墳で築造され、そのほとんどは１基のみの単独での築造であったことが解る。

更に町内の古墳時代後期の古墳をみると大束川水系の綾歌町南西部に所在する前山古墳群、平塚、室塚など、中大束川水系では南部の定連池東丘古墳群、熊倉池東古墳、宇閇神社古墳、畦田５号墳、椿谷古墳、津森穴薬師古墳などが確認されているだけで、そのほとんどが丘陵上に１～３基程度の小古墳群かあるいは単独で所在していることから、中大束川水系の後期古墳のあり方は町内全域での特徴であることが解る。

次に石室構造についてみると石室上半が削平されているものの平面形態は両袖式で、床面に礫床はない。玄室部の羨道部側幅は約1.4m、羨道部約１mを測り、玄室部と羨道部の幅に約0.4mの差が認められる。玄門部には北側のみに玄門立柱があり、羨道部より内側にせり出さず、玄門立柱によって羨道部は狭くなっていない。またちょうどその部分の床面には仕切り石が確認できる。閉塞石は仕切り石から約0.6mの位置にあり、石材を積み上げて構築されているのがわかる。

以上から床面に礫床を持たないこと、玄室部と羨道部の幅に差があること、玄門立柱が内側にせり出さないこと、閉塞石が羨道部にあり、石材を積み上げていることなどから定連池東丘４号墳は畿内の影響を受けた横穴式石室で、山崎分類のＢ型（Ｂｂ型？）とすることができる。しかし、玄門立柱を持つこと、仕切り石を持つことなど九州の影響も見られ、両者の影響を受けた古墳であることがわかる。

更に当古墳で最も特徴的なことは玄室部床面に礫床を有さないことである。町内に詳細がわかる横穴式石室がないことから、近接する市町の横穴式石室を見ると満濃町安造田東３号墳、同町代３号墳、丸亀市青ノ山古墳群、坂出市岡宮古墳、綾南町浦山５古墳、同本法寺西古墳など全てに礫床が確認されており、定連池東丘４号墳のみ特異な床面形態を呈している。礫床を持たないことが今後どのような影響の下この古墳が構築されたか、被葬者像などを考察するにあたり、貴重な古墳であることが考えられる。

今後町内での後期古墳の調査が進めば、地域の状況、他地域との関係がより深く検討できるものと考える。

参考文献

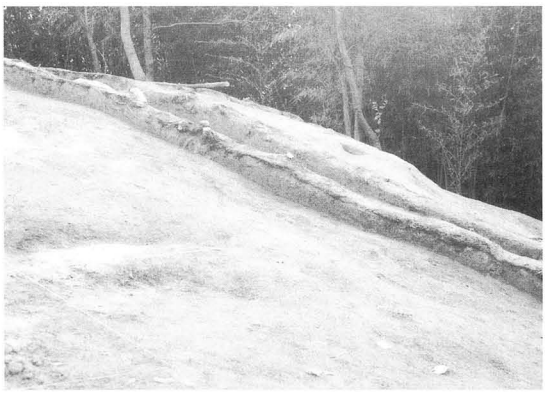
『定連池東丘１号墳』「香川県埋蔵文化財調査年報 平成６年度」香川県教育委員会 1995.3
『定連池東丘古墳群』「綾歌町内遺跡発掘調査報告書 第６集」綾歌町教育委員会 2002.3
「綾歌町史」綾歌町教育委員会 1976.6
山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究 ―中・四国編― 』1985
『安造田東３号墳』満濃町教育委員会 1991.7
『町代３号墳』満濃町教育委員会 1999.3
『青ノ山８号・９号墳発掘調査概報』丸亀市教育委員会 1984.3
『岡宮古墳』「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅶ)」香川県教育委員会 1986.3
『新編香川叢書 考古篇』香川県教育委員会 1983
『本法寺西古墳発掘調査概報』綾南町教育委員会 1988.3

①　定連池東丘古墳群遠景（北から）

②　２号墳近景（南から）

墳丘・石室内土層堆積状況

図版２



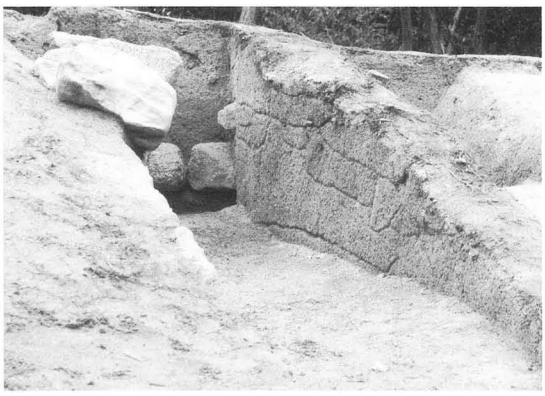
① 墳丘土層堆積状況（北から）

② 羨道部土層堆積状況

③ 墳丘土層堆積状況（北から）

④ 羨道部左側壁

⑤ 玄室内土層堆積状況（左袖）



⑥ 羨道部土層堆積状況

⑦ 玄室内土層堆積状況（奥）

⑧ 玄室部側壁検出状況

周溝内遺物と調査風景　　図版 3

① 周溝内遺物出土状況

② 玄室内調査風景

玄室部全景

図版４

① 奥壁側から望む

② 玄室側から望む

玄室部全景

図版 5

① 左側面から望む

② 右側面から望む

① 羨道から望む

② 直上から望む

玄室内第一次床面出土遺物　　図版７

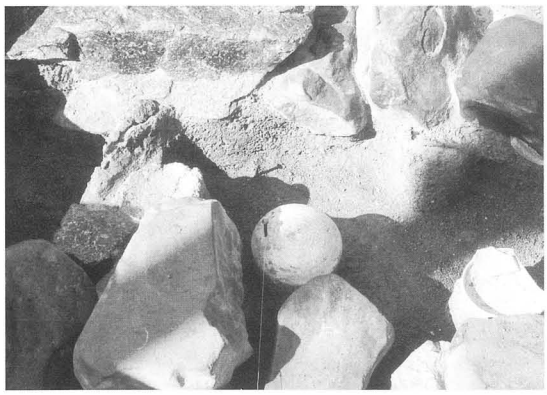
① 羨道から玄室内部を望む

② 玄室部右側隅

③ 上部から玄室部を望む

④ 鉄鎌・耳環検出状況（初葬時）

⑤ 奥側区画石付近

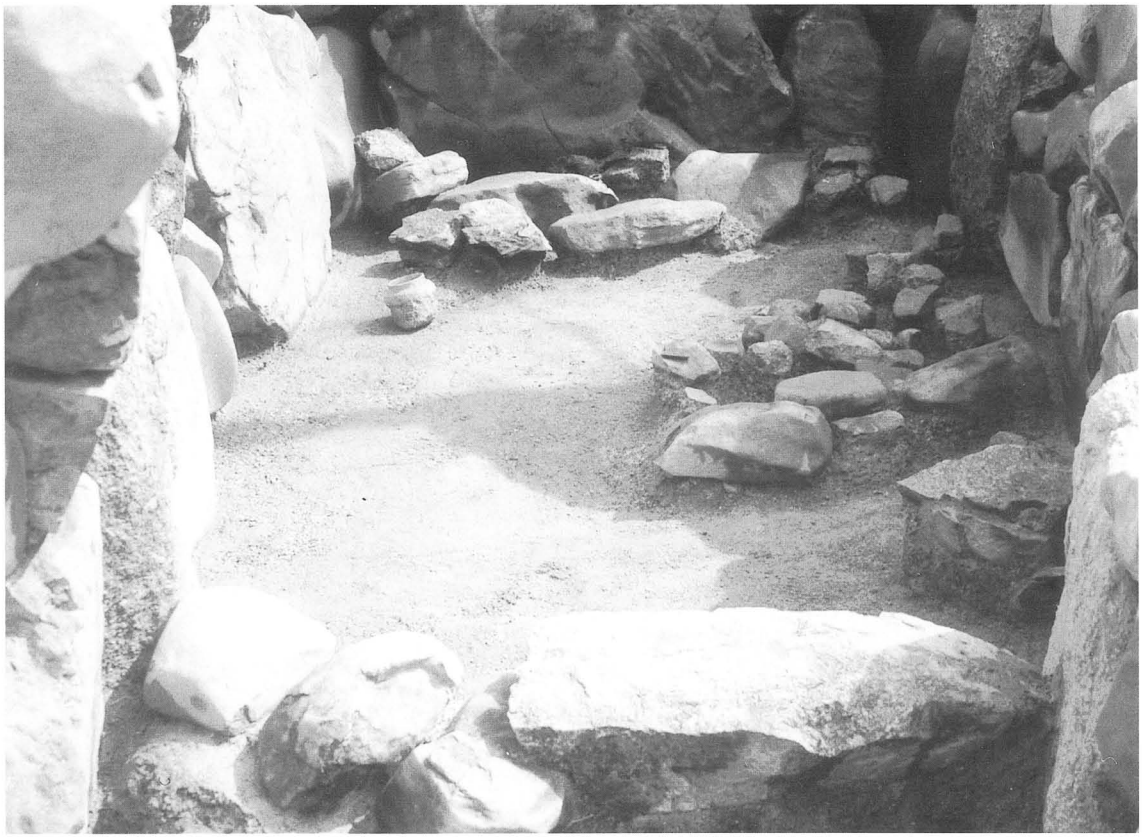


⑥ 仕切り石内部

⑦ 奥壁前部

⑧ 鉄鏃検出状況（追葬時）

玄室部第二次床面　　図版８



①　羨道から望む

②　直上から望む

玄室内第二次床面出土遺物（初葬時）　図版９

① 全景（直上より）

② 玄室右奥隅

③ 全景（羨道から望む）

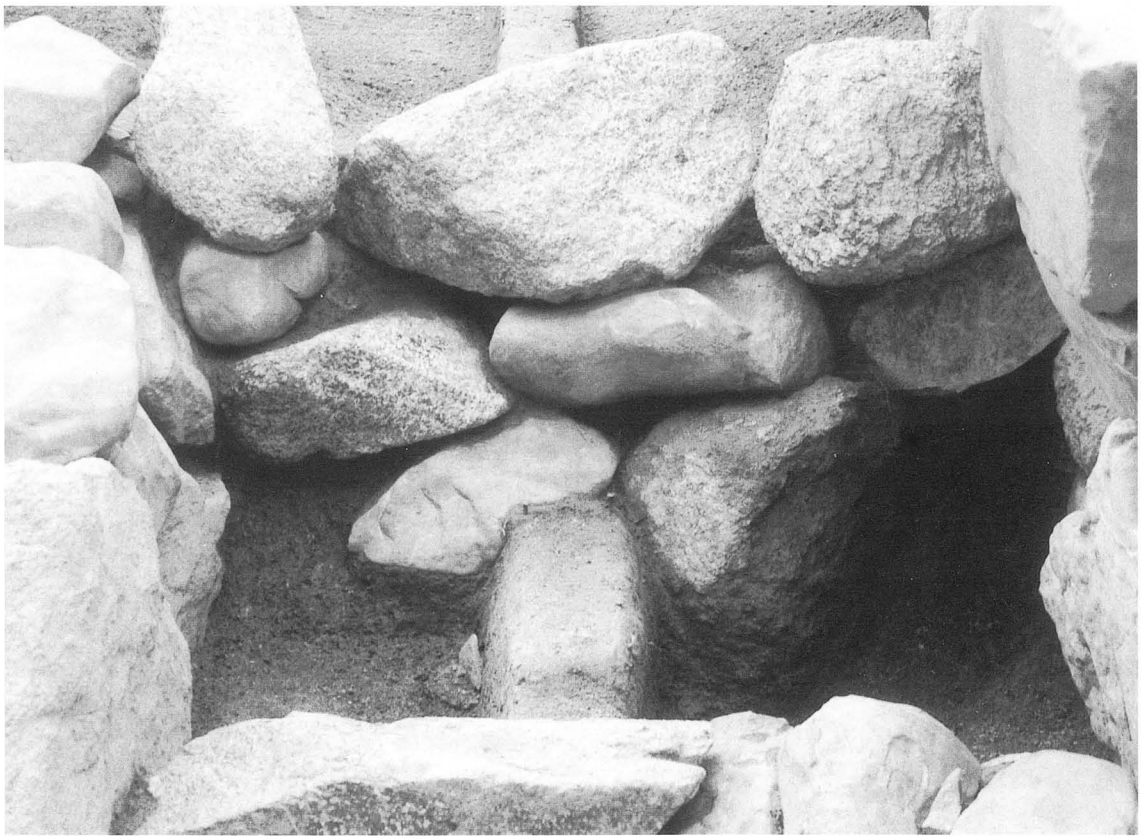
④ 奥壁前の区画石付近

⑤ 奥壁手前区画部（直上より）

⑥ 奥壁手前区画部

⑦ 奥壁手前区画部

① 追葬時墓道（玄室内部から）



② 閉塞石（玄室内部から）

① 内側斜上部から望む

② 墓道から望む

① 上部から望む

② 羨道部土層全景

① 奥壁側から望む

② 羨道側から望む

① 玄室部と羨道部右側側壁

② 玄室部右側側壁

石室構築状況

図版15

① 羨道部側部

② 玄室部側壁

① 羨道側壁

② 玄室側壁

① 玄室奥壁

② 玄室側壁

墳丘全景

① 石室全景

② 墓壙完掘状況

墳丘築造状況

① 墳丘築造盛土

② 墳丘築造盛土（玄室東側）

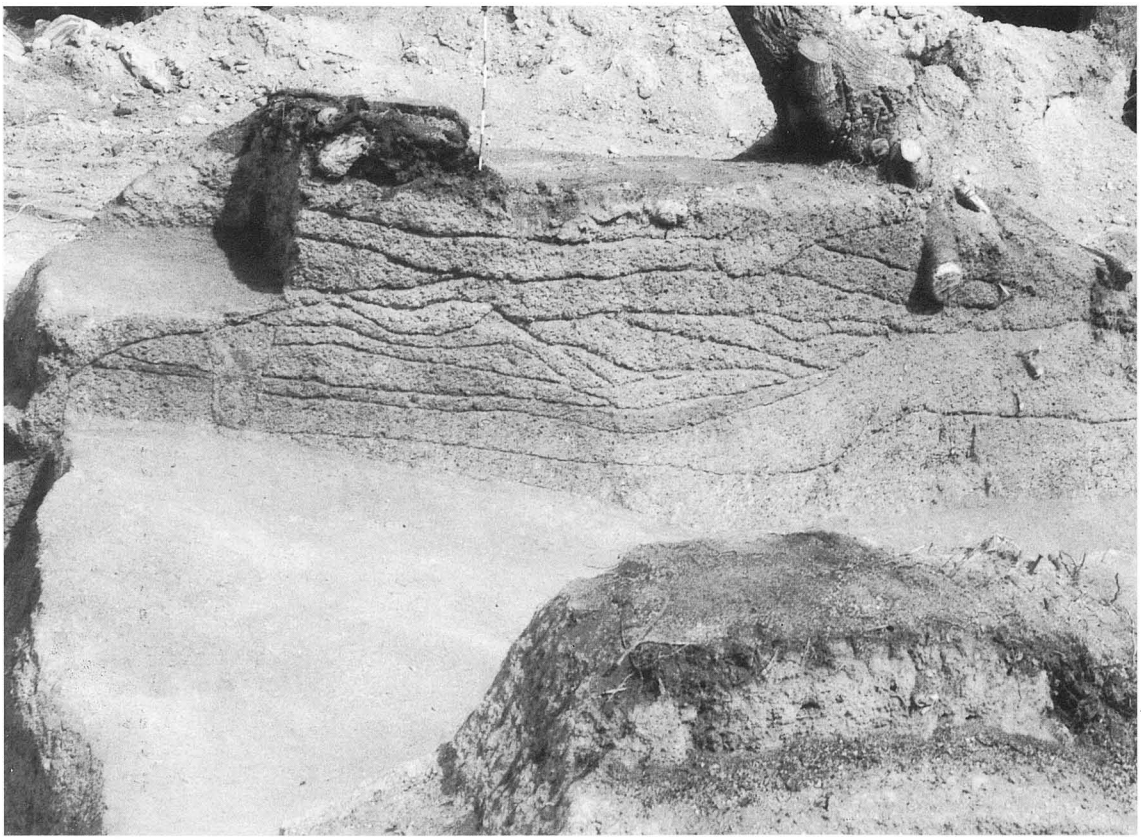
墳丘築造状況

① 墳丘築造盛土（玄室北側）

② 墳丘築造盛土（玄室南側）

墳丘築造状況

① 墳丘築造盛土（玄室南側）

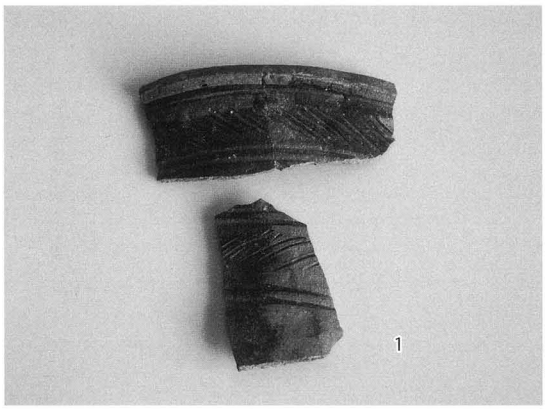


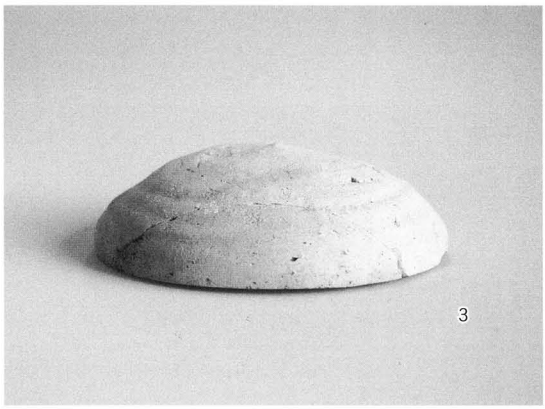
② 墳丘築造盛土（玄室南側）

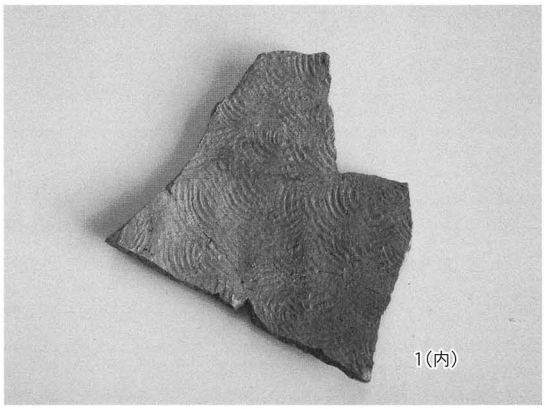
墳丘築造状況

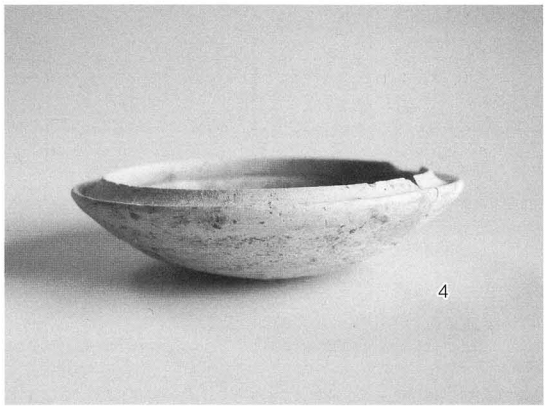
① 墓擴北側土層

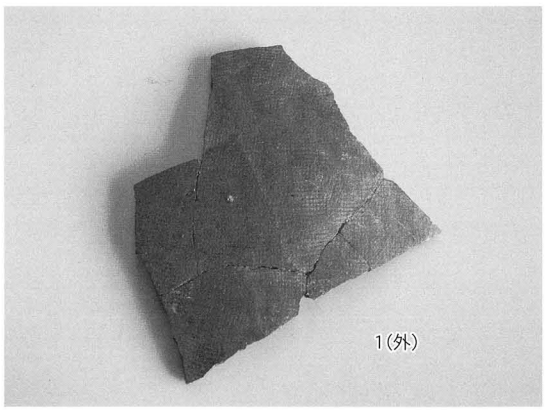
② 初葬時墓道

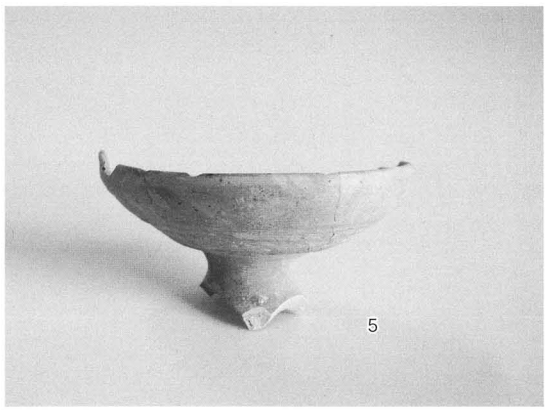

1

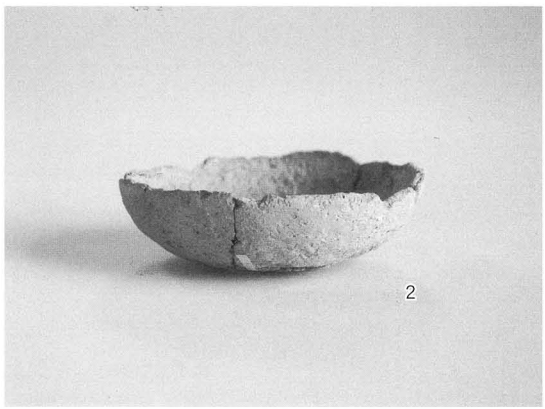

3

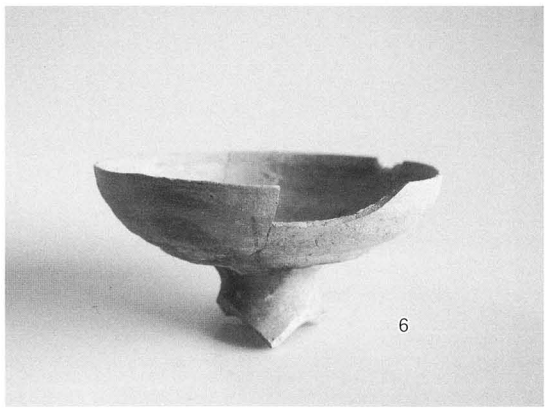

1(内)

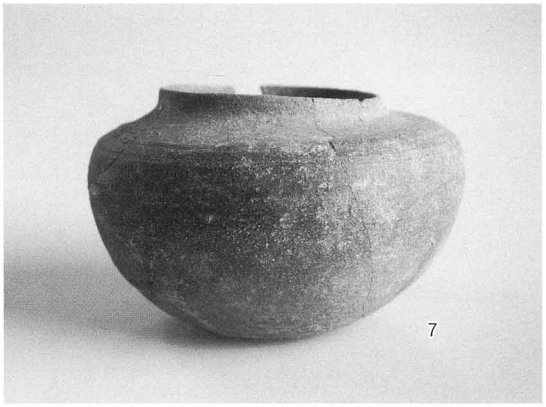

4

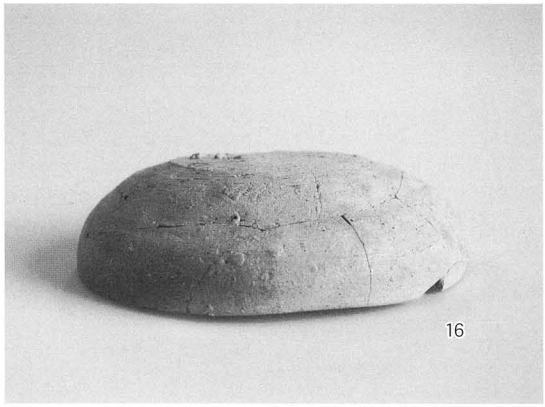

1(外)

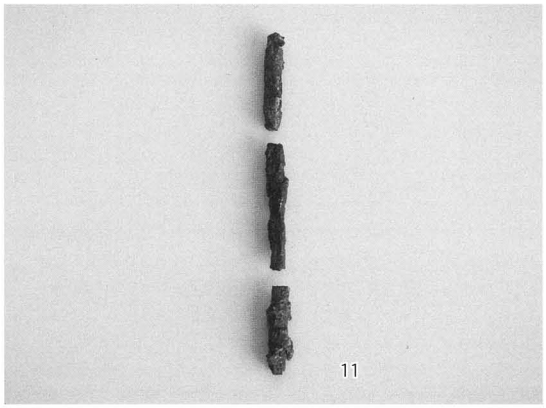

5

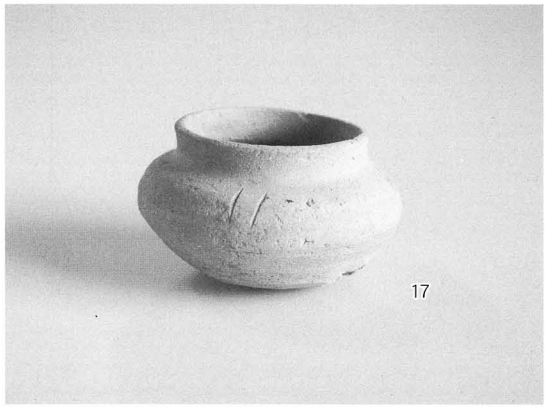

2

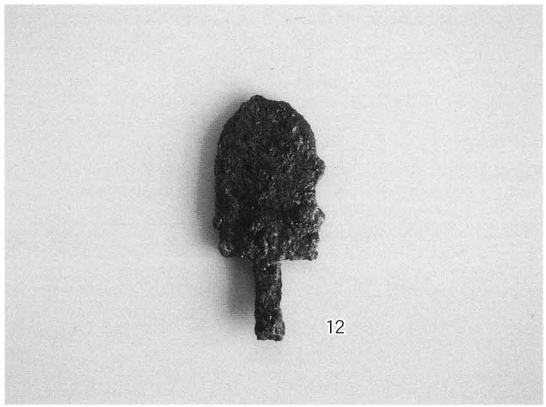

6

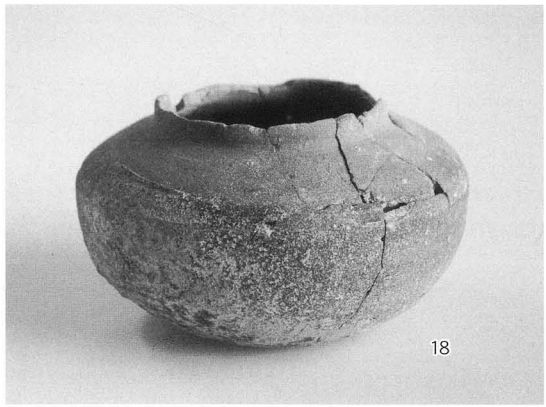

7

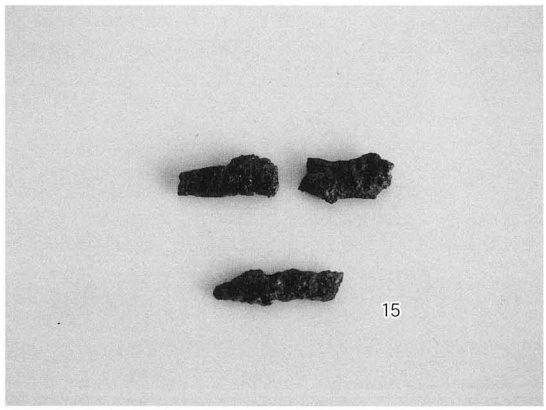

16

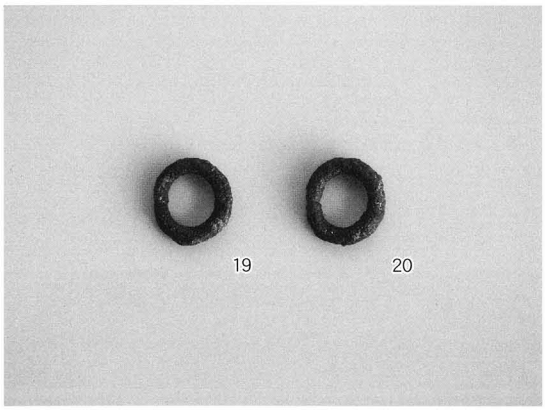

11

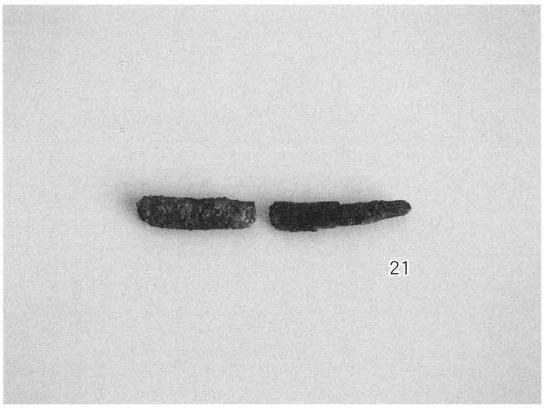

17

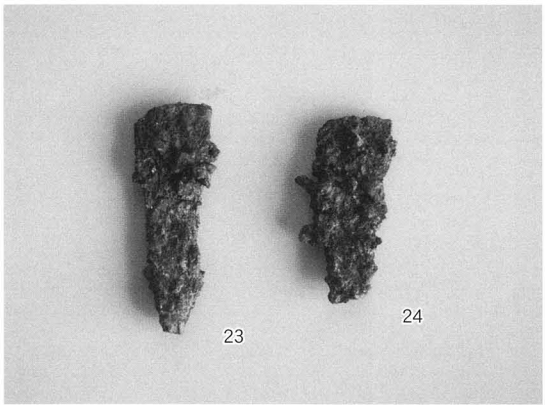

12

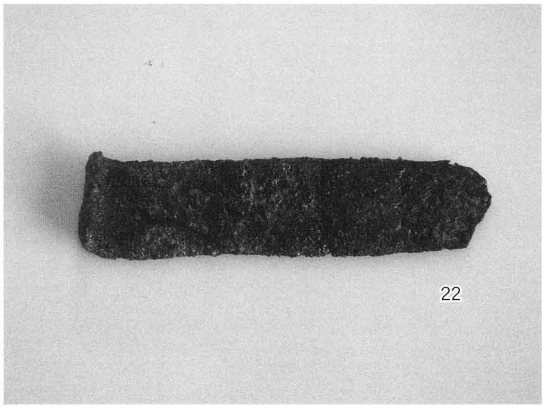

18

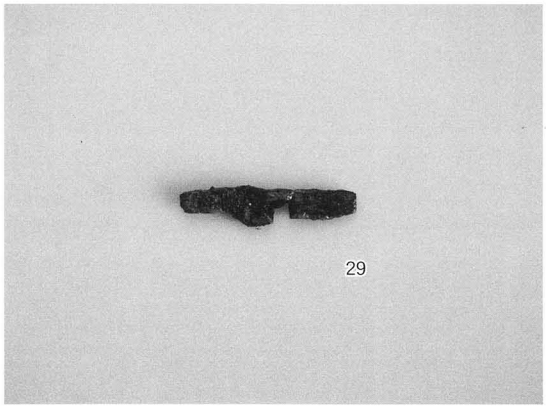

15


19
20


21


23
24


22


29

第４章　金属製品保存処理

香川県綾歌郡綾歌町定連池東丘古墳（４号）出土の金属製品の科学的保存処理

奈良大学文化財学科　　具志堅 有紀・高木 美知・高浪 育子

１．保存処理遺物

鉄鏃３点、刀子３点、鉄鎌１点、耳環２点、用途不明鉄製品一括の保存処理を奈良大学保存科学研究室にて行った。

２．科学的保存処理前の遺物の状況

鉄鏃・刀子はバラバラに分かれており、錆化が進行して膨張し、表面が層状に剥離し、変形が著しい。また、表面には土等も付着していた。

鉄鎌は大きく二つに破断され、表面から剥離した小片は７つあった。また、表面の層状剥離・損壊が進んでいた。

銅製耳環は緑の錆が進み脆弱化が進んでいた。

３．保存処理工程

①処理前調査・記録	⑤樹脂含浸（３回）
（Ｘ線透過撮影・写真撮影）	⑥錆除去
②洗浄	⑦樹脂塗布（３回）
③錆安定処理	⑧接合・復元
（ベンゾトリアゾール処理）	⑨処理後調査・記録（写真撮影）
④乾燥（105℃、3時間）	⑩保管・定期的観察

科学的保存処理工程表

綾歌町定連池東丘古墳（４号）出土金属製品の保存処理は保存処理工程表のとおり行ったが、各工程についてさらに詳述すると以下の通りとなる。

処理前調査・記録　　保存処理を始めるにあたって、写真撮影等の記録をとった。また錆の進行の度合いや本来の形状を調べるためにＸ線透過撮影も行った。

洗浄　　アルコール・キシレン・酢酸エチルの有機溶剤混合液で、ブラシ・筆・竹串を使って遺物に付着している粉状の錆や土を洗浄した。

錆安定処理　　銅製品はベンゾトリアゾール（BTA）のアルコール溶液に浸した。錆の進行の抑圧を図った。

乾燥　　出土金属製品の錆化、損壊の主原因である水分を除去するため恒温乾燥機を使って105℃、3時間を費やして乾燥した。

樹脂含浸　　充分に乾燥した遺物を樹脂含浸槽に挿入・密閉し、真空ポンプを作動させたまま高真空を保ち、遺物内空洞部や亀裂内の空気を抜き、１～２時間の後真空ポンプを

停止し、樹脂含浸槽にアクリル樹脂（パラロイドＮＡＤ－10）を注入し、遺物が充分に樹脂に浸った状態で一時間おいた。その後遺物を取り出し、自然乾燥を３日、60℃で加熱乾燥を２日行い、樹脂を充分に硬化させた。以上の作業をさらに２回くり返した。樹脂含浸を終えた遺物は、内部空洞部や亀裂に樹脂が入り硬化するため強化されるのである。

錆除去　遺物の表面に膨れ上がり形態を損なっている錆を、精密加工グラインダー等を使って取り除いた。

樹脂塗布　樹脂含浸を終え強化した遺物でも表面が空気中に曝されるために水分が付着し、新たに錆が進み遺物が損壊することがある。これを防ぐために遺物表面につや消し樹脂（パラロイドＮＡＤ－10）を刷毛で隅なく塗布し、充分に乾燥したのち、以上の作業をさらに二度くり返した。遺物表面を樹脂膜で覆い、外気を遮断しようとするものである。

接合・復元　接合にはエポキシ系接着剤（コニシ株式会社製クイック５）を使用した。エポキシ系接着剤は溶剤に不溶である。しかし、接着剤を分離したい時は、針・釘を着装したハンダゴテで接着剤を焼きとることやヘアドライヤーで加熱膨張させ除去することもできる。エポキシ系接着剤の使用は、同一素材の破損部接合のみに限定した。

処理後調査・記録　保存処理データ、写真撮影等の記録をとった。

保管・定期的観察　以上の方法で保存処理を行ったが、処理後の保管環境によっては再び錆化が進み損壊する可能性がある。そこで、遺物の保管は温湿度を一定に保つ空調設備の整っているところが望ましいが、ポリエチレン袋やタッパーウェアに乾燥剤等を添付して、温度変化の少ない場所に保管し、時々乾燥剤を新しいものと交換するなどは簡易な保管法である。又直射日光、紫外線の照射、埃はさけ遺物の調査や検査に際しても素手で触れることは避けた方がよい。

又、定期的に遺物の変化の有無を調査することも必要である。

４．保存処理の結果

鉄鏃は脆弱化し、各々寸断されており、ところどころコブ状の錆の膨らみもあり形状が損なわれていた。樹脂含浸等の強化、防錆処理ののち、Ｘ線写真と照合しながら錆の膨らみを除いて形を整え、接合した。

刀子については接合箇所が見つからず、樹脂含浸等の強化・防錆処理をするのみにとどめた。

鉄鎌は大きく二つに破断し、表面が層状に剥離・損壊するなどの状態にあった。しかし、今回保存処理した遺物のなかでは比較的原型をよくとどめていた。まず、損壊部分を接合し、樹脂含浸等の強化・防錆処理を行い、その後全体を接合した。

用途不明鉄製品は細片に分かれていた為、断片の接合・復原は不可能であった。そのため、強化・防錆処理のみにとどめた。

銅製耳環は、錆が膨張し、開口部がふさがっていた。しかし、原型はよく残していた。錆安定処理を行い、樹脂含浸等による強化・防錆処理を行った。

Ｘ線写真を撮影することにより、全体を錆に覆われた遺物の多くは輪郭が確認できた。

錆除去に際には出来る限り原型に近づけるように行った。

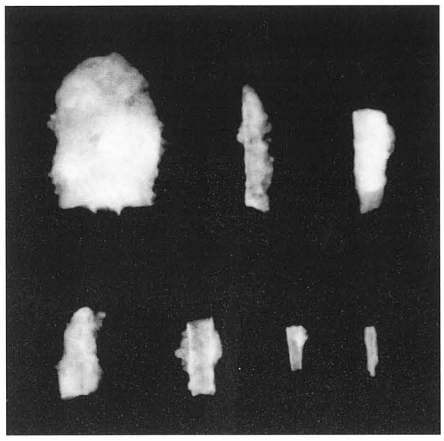
錆化が進み脆弱化した遺物を科学的な保存処理を施し、処理前に比べ、錆の進行を抑制し、強化することができた。しかし、今回の保存処理を行って、遺物の形状を永く維持するには、科学的な処置だけではなく、日頃の行き届いた管理が必要であり、埃の付着や水分の供給を断ち、新たな錆化を防ぎ、清潔で安定した保管環境を保つことも重要であると感じた。

保存処理工程において処理前調査・記録である写真撮影とX線透過撮影は植村明男、加藤千尋、土屋菜摘子、寺本修人の協力を得た。

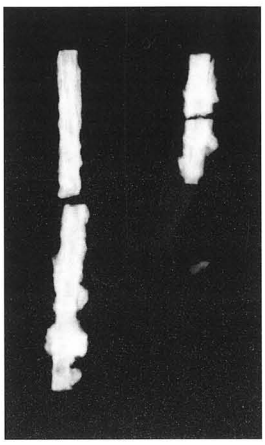
なお、保存処理作業全般から報告書作成にわたって奈良大学文化財学科西山要一教授の指導をいただいた。

（左列：保存処理前　　右列：保存処理後）

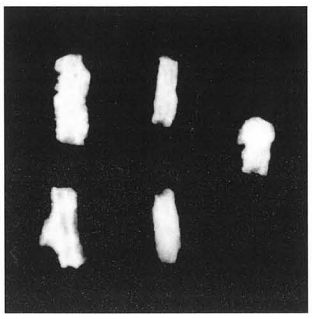
（F1. F2. F 3. 鉄鏃　F4. F5. 1 . 刀子　F6. 鉄鎌　A. B. 耳環）



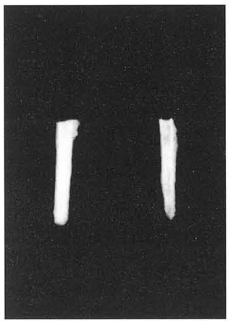
F1



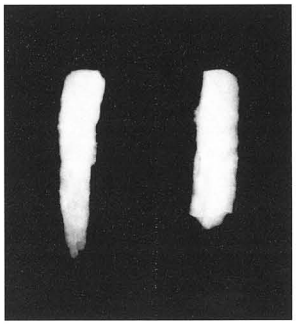
F2



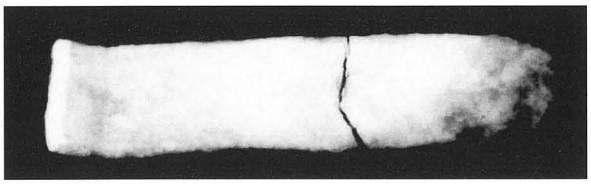
F3



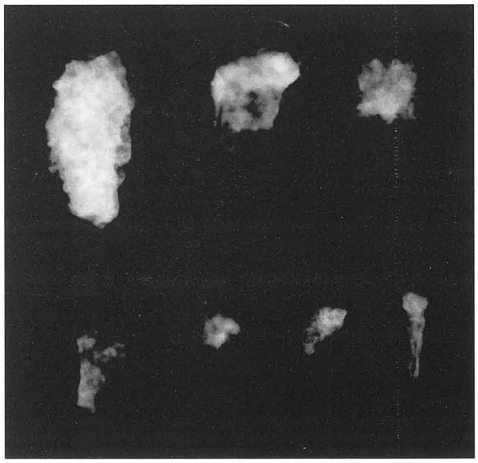
F4



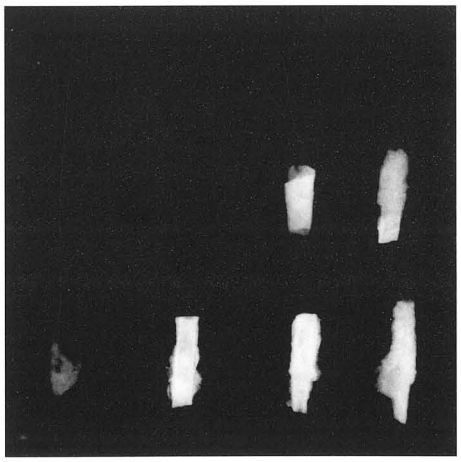
F5



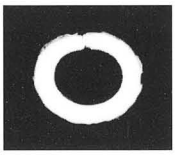
F6



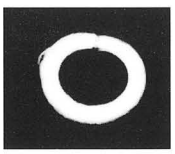
F6上部



1



A



B

報告書抄録

ふりがな	じょうれんいけひがしおかこふんぐん				
書名	定連池東丘古墳群				
副書名					
巻次	2003.3	シリーズ名		シリーズ番号	
編集者名	近藤　武司　　片桐　孝浩				
編集機関	綾歌町教育委員会				
所在地	〒761-2492　香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638　℡0877-86-5963				
発行年月日	２００３年３月３１日				

頁数	例言・目次等	本文	図版	挿図	総頁
	5 頁	50 頁	111 枚	10 枚	55 頁

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
じょうれんいけひがしおか 定連池東丘 2 号墳 3 号墳 4 号墳	綾歌町 栗熊西字熊倉 217-1	37384	00005～ 00008	34 度 12 分 30 秒	133 度 53 分 10 秒	2002. 1.23～ 2003. 3.31	約 500 ㎡	資材置場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
じょうれんいけひがしおかこふん 定連池東丘古墳 2 号墳 じょうれんいけひがしおかこふん 定連池東丘古墳 3 号墳 じょうれんいけひがしおかこふん 定連池東丘古墳 4 号墳	古墳？ 不明 古墳	不明 不明 古墳時代後期	2 号墳　土壙墓？ 3 号墳　なし 4 号墳　円墳・横穴式石室	須恵器杯・甕 須恵器片	

定連池東丘古墳群

平成15年３月31日

編集・発行　綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877)８６－５９６３

印刷　四国工業写真㈱